つきしたり、海の上に浮き上つて、噴水遊びをして遊んで居る中に、だん〳〵大きくなりました。

或日のこと、赤ちやん鯨、

『お母さん、今日僕ね、一人で遊びに行つて來るよ。』

『あゝ、いゝよ、いつておいで。でもね、遠くへは行くんぢやないよ。日の暮れない中に歸つて來るんですよ。』

赤ちやん鯨、おつぱいをいたゞくと、一人で元氣よく、ポツカリ海の上に浮き上つた。見るとお日樣がカン〳〵照つて、いつも青い海のお水が、金色や銀色にキラ〳〵キラ〳〵光つてゐる。

『いゝな。きれいだな。僕のお家はこんなにきれいだから、うれしいな。一つ噴水遊びをしよう。』

お母さん鯨にならつた樣に、ズー、シユー、ズー、シユーやつてると、一疋の鰹さん、スー〳〵と泳いで來た。

『鯨さん、一緒に遊ばうよ。』

『あゝ、遊ばう。だけどね、遠くへは行かないんだよ。そう〳〵、鰹さん、噴水をやつて見せようか。』

『噴水？　面白いな、やつて頂戴。』

『いゝかい、やるよ。』

ズー、シユー。ズー、シユー。

隨分高く上るな。面白いな。』

よろこんで見てゐた鰹さん、

『あのね、鯨さん、今度は僕のお家へいつて遊ばうよ。』

『僕ね、遠い所へは行かないんだから、此處で遊ばうよ。』

『いゝだらう。そう〳〵、僕のお家にはね、面白いものがあるよ。昆布のおす

べり、面白いよ。ね、いかうよ』

『え、おすべり？　面白いだらうな。』

『うん、面白いよ。一寸行つて來ようよ。』

『ぢや、ほんの一寸だけだよ。日の暮れない中に歸るんだよ。』

赤ちやん鯨、鰹さんについていくと、お日樣の光で、海の中まできれなこと。その中で、赤いお魚や青いお魚が遊んでゐて、ほんとにきれい。

『やあ、やあ、皆小ちやいな。己が一等大きいや。えらいぞ、えらいぞ。』

赤ちやん鯨、大意張でついていく。

鰹さんのお家に來て見ると、鰹さんの云つた樣に、大きな岩の下から、もう一つの岩の上に、昆布のおすべりがかかけてある。そのおすべりは、皆さんのおすべりを三つも四つも合せた程あるの。大きいでせう。澤山の鰹さんの兄弟たちは、スーと面白さうにすべつてゐる。一緒にきた鰹さん、一番上からスーとすべると、

『鯨さん、すべつて御覽。怖かないよ。』

鰹さんに習つて赤ちやん鯨、おすべりの一番上からスー。

『やあ、面白いな。

スー、スーとすべつてゐる中に、『遠くへ行くんぢやないよ。日の暮れない中に歸つて來るんですよ。』とおつしやつたお母さん鯨の言葉を忘れてしまつた。

フット氣がついて見ると、邊がだん〳〵だん〳〵暗くなつた。

『あ、もう日が暮れる。お家へかへれなくなつた。困つたな。寒くなつたな。』

とう〳〵赤ちやん鯨、シク〳〵泣き出した。

スー、スーとすべつてゐた鰹さん、おどろいて、

『どうしたの、え、どこかぶつたの。泣くんぢやないよ。ね、どうしたの。』

『僕ね、お家へ歸れなくなつたんだもの。』

『あゝ、それで泣いてるの。心配ないよ。送つてあげるからね、泣くんぢやないよ。ね、さあ、行かう。』

鰹さんに赤ちやん鯨、お家を出たが、暗くて暗くて道がわからない。海の上へスーツと出て見ても、やつぱり眞暗。

『困つたな、困つたな。』

二人が海の上にポカリ、浮いてると、邊がだん〳〵だん〳〵明るくなつてきた。

『おや、明るくなつて來るよ。何だらう。』

『おや、本當だな。明るくなつたね、何だらう。』

見ると、眞圓いお月樣が向の方にポカリ。

『お月樣だよ。明るいな。お月樣、ありがたう。』

『お月樣、ありがたう。』

元氣になつて泳いで行く中に、もうお家の前へやつて來た。お家の前にはお母さんが、ニコ〳〵ニコ〳〵待つてゐらつしやる。赤ちやん鯨駈けて行つて、

『お母さん、只今。おそくなつて堪忍して頂戴。』

『あ、よし〳〵、何處へ行つて來たの。おや〳〵、鰹さんに送つていたゞいたの。鰹さん、有難う。』

『今日はね、鰹さんのお家のおすべりで遊んだの。面白かつたよ。』

『さう、それはよかつたね。鰹さん、有難う。』

すると鰹さん、

『ぢや鯨さん、左樣なら。又遊ばうね。左樣なら。』

『左樣なら。鰹さん、有難う。』

赤ちやん鯨、お家に入ると、おいしい夕方のおつぱいを澤山いたゞくと、お母さんにだつこして、スヤ〳〵スヤ〳〵ねんねしました。おしまひ。

泣いたお話

注意
- 主眼點　輕い笑ひ。
- 時間　十分。
- 其他　繰り返しの所をはつきり。

水がチョロ〳〵〳〵流れながら、だん〳〵川を下つて行きました。すると向ふの方にガッタンゴットン、ガッタンゴットンと一日中ぐる〳〵廻つて居る水車がありました。水車つて知つてるでせう。大きな車があつてそれに水がザアと當るとくる〳〵廻るの。知つてますね。あの水車がありました。その水車の小屋の隅つこの所に小さな穴が明いてゐて、その中に鼠の忠兵衛さんのお家がありました

忠兵衛さんのお家は、お父さんの忠兵衛さん、その子供のチュウ〳〵の忠ちやんとの二人つきり。忠ちやんは毎日いたづらばかりしてゐるし、お父さんの

忠兵衛さんは、一生懸命で働いては子供をそだてゝ居りました。

所がある日のこと、いつもは働き手の忠兵衛さんですけれども、今日はどうしたのかお家で寢轉んで休んで居りました。忠ちやんは相變らず、あちらこちらを遊んで歩いてゐました。

その日のお晝頃、遠くの方で何だか大きな音がした樣だと思つてゐると、その中にグラ〳〵と大きな地震がやつて來ました。忠兵衛さんは寢轉んで居たのを急に飛び起きて、

『さあ、大變だ。』

大急ぎで外へ飛び出さうと思つてゐると、屋根裏につるしてあつた梯子が、丁度忠兵衛さんの身體の眞直上へ落ちかゝつて來ました。

『アッ！』

といふ間もなく、忠兵衛さんはペチャンコになつてしまひました。もう

『チユウ！』

とも何ともいふことが出來なくなつてしまひました。

そんな事とは知らない忠ちやんは、水車小屋のお屋根の上に乘つかつて、あつちへ行つたり、こつちへかけたりしてはねまはつてゐると、そこへグラ〳〵〳〵と大地震。忠ちやんは吃驚仰天してブル〳〵震へながら、

『お父さん、大變だよ、誰れかゞ來て小屋をつぶしてしまふよ。助けてー。』

といつてゐるうちに、一寸した拍子に足を踏みはづすと、お屋根の上をコロコロ〳〵と轉んで、すぐ前の溝の中へチャブン。

『アッパッパッパッパッ、お父……アッパッパッパッ、たすけて、アッパッパッパッパッ……』

一生懸命で游いで漸く岸へ上りました。

『アー、驚いた、誰れがあの家を潰さうとしたんだらう。然しだあれも居ない

なあ。アー、それぢあ地震だつたんだな。おや、それはさうとお父さんはどうしたのか知ら。行つて見て來やう。どつこいしよ。あー痛い。先刻お屋根の上で轉んだ時に打つたんだな。あー痛い。』

小屋の中へ入つて來ると、急いで隅つこのお家へやつて來ました。來て見るとどうでせう、そこにはお父さんの忠兵衛さんが梯子の下敷になつて、ペチャンコになつて死んで居る。

『お父さん！』

といつてそばへ行つても、もう忠兵衛さんは何とも言はない。

『お父さん、お父さん、あーあ、お父さんは死んぢやつた。わーん。』

到頭泣き出してしまひました。

忠ちやんが、

『わーん、わーん。』

と泣いてゐると、

すぐお隣りに住んでゐた箒さんがその泣聲を聞きつけて、

『これ〳〵、忠ちやん、どうしたんだい。えッ、そんなに泣いてばかりゐたんぢや何のことだかわからない。さあ、涙をふいて話してごらん。どうしたの、えッ。』

すると忠ちやんは泣きながら、

『あのね、をばさん。家のね、家のお父さんが死んぢやつたの。』

『えッ、忠兵衛さんが死んだつて、どうして死んだい。』

『さつきの地震でね、梯子がおつこちて來て死んぢやつたの、ペチャンコになつて。』

『ペチャンコになつて死んだつて。まあ可哀さうに。忠兵衛さんが死んぢやつたか。わーん。』

箒のをばさんも泣き出してしまひました。

するとその近くに居た障子さんがその聲を聞きつけて、

『もし〳〵、箒さん、どうしてそんなにお泣きなさいますか。何か悲しいことでもあるんですか。』

『おや、障子さんですか。まあ可哀さうにかういふわけなんですよ。あの隅つこのお家の忠兵衛さんが梯子の下敷になつて、ペチャンコになつて死んださうですよ。だからその子供の忠ちやんが泣いて可哀さうですから、私も泣いて居るんです。わーん。』

『おや〳〵、さうですか。まあ〳〵可哀さうに、死んだのですか。さうですか。わーん。』

障子さんが又泣き出しました。

すると屋根の瓦さんがそれを聞きつけて、

『障子さん〳〵、全體どうしたといふんです。あなたの泣いた所など始めて見ました。どうしてお泣きになるんです。』

『やあ、瓦君ですか。まあ可哀さうに、かういふわけなんですよ。先刻の地震で鼠の忠兵衛さんが、梯子に打たれてペチャンコになつて死んで、その子供の忠ちやんが泣いて、お隣りの箒さんが泣いて、それで私も泣いて居るんです。』

『おや〳〵、さうですか。それはまあ可哀さうに。忠兵衛さんが死んだのですか。さうですか。わーん。』

瓦のをぢさんまで泣き出してしまひました。丁度そこへ烏の勘五郎が來て居ましたが、瓦さんが、こんな大きな涙をボロ〳〵こぼして泣いてゐるのを見て、

『もし〳〵、瓦さん、全體どうしたといふのです。あなたが雨も降らないのに涙を流すといふことは初めてだ。どうしたんです。』

『やあ、勘五郎さんですか。まあ可哀さうに、かういふわけなんですよ。先刻

の地震で鼠の忠兵衛さんが梯子に打たれてペチャンコになつて死んで、その子供の忠ちやんが泣いて、箒さんが泣いて、障子さんが泣いて、それで私も泣いて居るんです。』

『おや〳〵、さうですか、それはまあ可哀さうに。忠兵衛さんが死んだのですか。さうですか。わーん。』

烏の勘五郎さんまで泣き出してしまひました。

するとその水車小屋のすぐ側に、よく葉のついた一本の大きな欅の木がありましたが、その欅さんが勘五郎さんに、

『もし〳〵、烏の勘五郎さん、どうしたんです、無暗に悲しさうな泣き聲をしてるぢやありませんか。どうしたんです。』

『おや、これは欅のをぢさんですか。まあ可哀さうにかういふわけなんですよ。先刻の地震で鼠の忠兵衛さんが梯子に打たれて、ペチャンコになつて死んで、その子供の忠ちやんが泣いて、箒さんが泣いて、障子さんが泣いて、瓦さんが泣いて、それで私ら泣いて居るんです。』

『おや〳〵、さうですか。それはまあ可哀さうに、忠兵衛さんが死んだのですか。さうですか。わーん。』

大きな〳〵欅のをぢさん、特別に大きな聲を出して、わーん〳〵と泣き出しました。欅のをぢさんは、綺麗な葉つばの着物を立派に着て居ましたが、あまり身體をゆすぶつたので到頭奇麗な葉つばの着物がなくなつて、裸になつてしまひました。

忠ちやんと、箒の小母さんと、お隣の障子さんと、屋根の瓦さんと、烏の勘五郎さんと、はだかんぼうの欅のをぢさんとは、一所にわーん〳〵と泣いてゐました。といふお話。

蛙のお家

注意

- **主眼點** 蛙が角力の歸りに靴をひろつて、それをお家にしたといふ話めて單純なものです。
- **時間** 五分。
- **其他** おたまじやくしから蛙になる經過を話の始にかきましたが、理科的の話になりすぎない程度で、こんな知識も與へたいとおもひます。

暖かい風がそよ〳〵、吹いて來ると青い着物を着た背の高い柳さんが、長い袂をユラーリ、ユラーリ。その柳さんの圍は青い草原。その草原に、黄色いたんぽゝがにこり。こつちの方には、紫色のすみれがにこり。そつちの方には、赤いれんげ草がにこり。ニコ〳〵、ニコ〳〵と笑つてゐました。その草原の向は廣い田圃。田圃にはまだ冷いお水が一杯。その冷いお水の田圃の中に、うすい、すきとほつた袋が、一つ、二つ、三つ。よく見ると、その袋

の中に何か黑いつぶが、それは〳〵澤山ある。その袋には蛙さんが、じつと番をしてゐました。何でせうね　さう〳〵、蛙さんの卵。暖いお日樣が、ニコニコ〳〵田圃の上にいらつしやると、袋の番をしてゐた蛙さん、

『あのね、お日樣、私の大事なこの卵を早く孵へして頂戴。』

『よし〳〵、もうすぐだよ。待つておいで。』

その中に、田圃のお水がだん〳〵だん〳〵溫くなると、袋の中の黑いつぶが、だん〳〵大きくなつた。大きくなると尾がヒヨコリ。こつちのつぶにも尾がヒヨコリ　あつちのつぶにもヒヨコリ。ヒヨコ〳〵、ヒヨコリ。すつかり尾が生えると、皆おたまじやくしになつてしまつた。すると、いつの間にやら、尾の生えたおたまじやくしさん、袋の中から飛び出すと、暖かくなつたお水の田圃を、チヨロリ、チヨロリ、チヨコ〳〵〳〵ッと泳ぎだした。之を見た蛙さん大喜び。おいしい食物を毎日々々どん〳〵やると、おたまじやくしさん、だん〳〵だん〳〵大きくなつた。

或日のこと、こつちのおたまじやくしに、ニユッ〳〵〳〵、四つの足が飛び出すと、今度はお尻の尾が、チヨッとひつこんだ。あつちのおたまじやくしも、ニユッ〳〵〳〵、四つの足が飛び出して、お尻の尾がチヨッ。あつちでも、こつちでも、ニユッ〳〵〳〵、チユッ。ニユッ〳〵〳〵、チヨッ。すつかり蛙になると大喜び。今までお水の中にばかりゐた蛙の坊ちやん、今度は向の草原へ、ピヨン〳〵、ピヨン〳〵ととんで行く。

『おい、皆、あそこの草原へ行かうや。暖かいよ、面白いよ。』

ピヨン〳〵、ピヨン〳〵。草原には何がありました。さう、柳さんがゐる。

『おや〳〵、今日も蛙さん澤山遊びに來たな。こちらへおいで。こちらへおいで。』（調子面白く。）

長い袂をユラーリ、ユラーリ、ユラ〳〵〳〵ッと動かすと、蛙の坊ちやん、ピヨン〳〵〳〵、ピヨン〳〵〳〵と飛びついて遊ぶ者もある。やはらかい草の上で、

『はつけよいや。のこつた〳〵。負けるな、勝てよ。はつけよいや。のこつた。のこつた』

お角力をとつてゐる者もある。

或お天氣のいゝ日のこと、大勢の蛙の坊ちやん、朝御飯をいたゞいてしまふと、父ちやん蛙に母ちやん蛙。

『あのね、皆立派な蛙さんになりましたから、今日はお祝に向の草原でお角力をやりませう』

『お父さん、お角力？　面白いな。』

『さあ、これから一緒に出かけませう。』

大勢の蛙さん、ピヨン〳〵〳〵、ピヨン〳〵〳〵。暖い草原へやつて來ました。皆が圓い輪になると、眞中がお角力の土俵　西と東の二つに分れると、父ちやん蛙が行司さん。蛙の坊ちやん、西と東とから一人宛出てくると、

『ようし。』（力士の向ひあふ身振。）

『ようし。』（同上。）

と向ひ合ふと、行司の父ちやん、

『よく見合せて。よつ、はつけよいや。のこつた〳〵。負けるな、勝てよ。はつけよいや。のこつた〳〵。』

お角力がすむと、母ちやん蛙につくつていたゞいた、おいしいお辨當をいただいて、

『あゝ、面白かつた。さあ、歸りませう。』

ピヨン〳〵〳〵、ピヨン〳〵〳〵。

田圃のお家へ歸つていく途中、ヒョイと見ると、靴が一つおちてゐる。

『おや、何だらう。』

『あ、わかつた、お家だよ。』

『いや、お船だらう。』

『皆でお家へもつて歸らうや。』

『もつて行かう。』

『もつて行かう。』

靴の紐をつかむと、ヨイショ、ヨイショ。（重さうな身振。）

『おや、なか〳〵おもいぞ。そらひけ。』

ヨイショ、ヨイショ、後の方からも、ヨイショ、ヨイショ。

『そりや、ひけ。』

『やれ、おせ。』

ヨイショ、（引く身振）ヨイショ。（押す身振）田圃のお家へもつて來ると、一二のザブン！　水の中へ入れると、ポカリ浮いた。

『やあ、お船だ、お船だ。』

『面白いな、面白いな。』

『乘らうや、乘らうよ。』

あつちからもこつちからも、蛙の坊ちやんとびのるからたまらない。ヨロヨロ〳〵、ヨロ〳〵〳〵ッとかたがる度にお水が入つて、ブク〳〵〳〵と沈んでしまつた。

『あゝ、丁度いゝや。今度はお家だ、お家だ。これからこゝにねんねしよう。』

それから蛙の坊ちやん、皆仲よく靴のお家でねんねしました。おしまひ。

魚釣り

注意　主眼點　釣つた魚を逃してやつた話。
時間　七八分。

『よつちやあん、遊びませう。よつちやあん、遊びませう。』
呼ぶ聲がしたので、よつちやんは大急ぎでかけて行つて、御門の方を開けて見ました。
『あゝ、きいちやんか。』
『よつちやん、遊ばないかい。』
『何して遊ぶんだい。』
『あのね、今日はお向ふの川へお魚釣りに行かうぢやないか。』
『うん、面白いなあ。行かう〳〵。』

それから二人はお家へ歸つて、長い竹の棒に糸をくつつけて、その糸の先に西洋人の鼻の樣にこんなに曲つた針をくつつけて、すつかり用意をしました。

二人は釣竿を兵隊さんの鐵砲の樣にかついで、

『オイチニ、オイチニ。』

と元氣よく川の所までやつて來ました。

『よつちやん、何處が好いだらう。』

『さうだね、あそこの柳の木の下の所にお魚がたくさんゐるよ。』

『さうかい、ぢやああそこへ行かう。』

『どつこいしよ。』

『さあ、お魚を釣るよ。あのね、先にお魚を釣つた方がえらいんだよ、いゝかい。』

二人は釣竿をヂーッと持つてゐたが、中々釣れない。

『釣れないね。』

『をかしいね。』

『どうしたんだらう。』

『お魚が居なくなつたんだらうか。』

いつてゐると、その中によつちやんの糸をつん〳〵と引いたので大喜び、

『よし來た。』（右手で釣竿をあげ、左手で魚を捉へる態度。）

『やつ、こんなお魚が釣れたよ、何てお魚だらう。きいちやん、これはなんてお魚だい。』

『知らないなあ。きれいなお魚だね。』

『きいちやん、まだ釣れないかい。』

『うん、まだ釣れないんだ。よつちやんの方がさきにつれたんだからえらいんだね。僕も早く釣れるといゝなあ。』

二人は又一生懸命で釣竿を出してたけれども、もうちつとも釣れない。

『ちつとも釣れないね、どうしたんだらう。』

『一匹釣つたものだから、驚いて外のお魚がみんな逃げちやつたのかも知れないなあ。』

『さうかも知れないよ。外の所へ行かうか。』

『さうしよう。ぢやあ向ふの竹藪の所へ行かう。』

釣竿をかついで、

『オイチニ、オイチニ。』

『きいちやん、さつきのお魚が籠の中ではねてるよ。』

『やあ、面白いなあ。綺麗な腹をだしてはねてるね。』

『さあ、こんどはこゝで釣ることにしよう。』

『どつこいしよ。』

針に餌をつけて、ヒョイとはふりこんでヂーッと見てゐました。所がちつとも釣れない。

『つまらないなあ。きいちやん、もう歸らうか。』

『つまらないね、歸らうか。』

きいちやんが釣竿をあげやうとすると、何か糸の先にひつかゝつてゐる樣に重い。

『アッ、重いぞ、何か食ひついてゐるのかも知れない。だけどちつとも引かないなあ、なんだらう。』

ビーン。（釣る態度、前と同じ。）

『オヤ、このお魚は面白いなあ、着物を着てるよ。リボンなんぞさしてるぞ。なあんだ。こりやお人形だ。』

『きいちやん、それはね、お隣の花子さんがこの間なくしたお人形だよ。』

『さうかい。ではこれを花子さんに持つて歸つてやらうよね。お魚はちつともつれないで、こんなお人形なんか釣れてもつまりやしないなあ、歸らうか。』

と言つてゐると何處かで、

『もし〳〵、もし〳〵。』

『オヤ、きいちやん、何か言つたかい。』

『ううん、何とも言やしないよ。』

『をかしいなあ』

と又、

『もし〳〵、もし〳〵。』

『よつちやん、何か言つたかい。』

『ううん、何とも言やしないよ。』

『をかしいなあ。』

すると、

『もし！〳〵、もし〳〵、こゝですよ。籠の中ですよ。』

『やッ、籠の中だつて言つたよ。お魚が呼んだのかな。』

『お魚さん、なんだい。』

『もし〳〵、坊ちやん、わたしはこんな籠の中にひとりぼつちでゐるのはつまらなくてしやうがないんです。川の中のお家には、お父さんや、お母さんや、姉さん達が待つてゐますから、どうかお家へ歸して下さいませんか、お願ひです。』

『可哀さうだね。』

『可哀さうだね。』

『逃してやらうか。』

『逃してやらうか。』

『逃してやらうよ。』
『逃してやらうよ。』
『ちやあお家へお歸り。』
さういつて、ヂャボンと川の中へ逃してやりました。
『今のお魚はお家へ歸つて喜んでるだらうなあ。』
『お父さんのお魚やお母さんのお魚に僕等の事を話してるかも知れないよ。』
『僕等も家へ歸らうねえ。』
『うん、さうしてお父さんやお母さんに今日のことをお話しよう。』
『花子さんのお人形は持つて歸つてやらうね。』
二人は又釣竿を肩にして、
『オイチニ、オイチニ。』
と元氣よくお家へ歸りました。

お花のお禮

注意

主眼點　雞に食はれる野原の若草をみた花子さんは、家から雞の餌をもつてきて、若草をたすけた。たすけられた草が、お禮に花のお家へつれていくといふ筋です。

時間　六分。

其他　話の中に、因果應報の教訓を餘りつよくいれたくないと思ひます。

青い野原がありました。野原の向の方には、赤い桃の花がきれいに咲いてゐる。青い草の間には、きれいなたんぽゝや、すみれが咲いてゐる。野原のこつちの方には、青い柳がある。その柳の木の下に、お家が一つ。花子さんのお家です。花子さんのお家には、この間生れたばかりの澤山のかあいゝひよこが、ピイ〳〵、ピイ〳〵。花子さんにおいしい食物をいたゞくと、お母さんの鷄さんにつれられて、青い野原へ遊びに行きました。

いつもの樣に、花子さん幼稚園から歸つて來ると、ポカ〳〵お日のあたつた青い野原へ遊に行きました。見るとお家の鷄さん、かあいゝひよこをつれて遊びに來てゐる。親鷄さんが、クックッ、クックッ、ひよこを呼ぶと、ピイ〳〵、ピイ〳〵、かけていくと、土の中からやつと顏を出したばかりの小さい草を、まだ黃色い嘴で、チッ〳〵、チッ〳〵、つゝいてゐる。クッ〳〵〳〵、ピイ〳〵〳〵、チッ〳〵〳〵。（身振三つに注意。）

『まあ、可哀さうに、ひよこがたべてるよ。ね、いゝ子だから、この草はたべてはいけないよ。あつちへお行き。』

親鷄さんにひよこさん、そんなことは知らない樣子で、クッ〳〵〳〵、ピイ〳〵〳〵、チッ〳〵〳〵。

『ほんとに可哀さうだ。どうしたらいゝかしらん。（間）あつ、さうだ。』（拍子）お家にかけて行つて、いつもやる鷄さんの御飯をもつてくると、

『と、と、と、と。こちらへおいで。ほら、おいしい御飯を上げるよ。と、と、と、と。』（身振に注意。）

すると今まで、チッ〳〵〳〵と、顏を出したばかりの小さい草をたべてゐたひよこ、皆ピイ〳〵〳〵、ピイ〳〵〳〵、花子さんの方へかけてくると、草はたべないで、御飯をたべだした。

『まあ、よかつた。もうね、野原の小さい草はたべるんぢやないよ。いゝ子だからね。』

或日のこと、いつもの樣に花子さん、お家の前の青い野原で遊んでると、

『花子さん、今日は。』

『おや、誰だらう。誰もゐないな。をかしいな。』

すると又、

『花子さん、今日は。』

『又よんでるぞ。何處だらう。私を呼んでるのは誰？』
『私ですよ。この間ひよこさんに食はれる所を助けていたゞいた私ですよ。』
よくみると、花子さんの足下にこれつばかり(身振で)の一寸法師。お花のついたきれいな着物をきた一寸法師。
『まあ、可愛い赤ちやんね。』
『あのね、花子さん。今日はね、この間のお禮にね、私達花の神樣が、花子さんを呼んでいらつしやい、一緒に樂しく遊びませうつておつしやつたから、お迎に來ました。さあ、一緒に參りませう。』
『さう、それは有難う。ちやつれていつて頂戴。』
するとお花の一寸法師、
『お馬車を持つて來ましたよ。さあ、おのりなさい。』
みると、お花のきれいな馬車。お馬車のお馬は二つのかたつむり。

『まあ、かあいゝきれいなお馬車ね。私のつて大丈夫かしら。こはれない？』
『え、え、大丈夫ですとも。さあ、おのりなさい。』
花子さんにお花の一寸法師、お馬車にのるとガラ〳〵〳〵。かたつむりのお馬の走ること、走ること。きれいな草の間をどん〳〵どん〳〵かけていくと、前の方にヒヨイ、今まで見たことのない立派なお家が見える。
『あ、きれいなお家ね。誰のお家？』
『あれが私達のお家。今日はあそこで遊びませう。』
『一體あんなお家があつたかしらん。』
『いゝえ、これはね、私達をいちめる人には見えないの。可愛がつて下さる花子さんにだけ見えるの。』
『さう、ほんとにきれいだね。』
きれいなお花の御門の前にビシヤッ、お馬車が止るとお花の一寸法師、

『皆さん、花子さんいらつしやいましたよ。』

大きな聲で呼ぶと、出て來る。みんな可愛い花の着物をきた一寸法師。

『花子さん、いらつしやい。』

『花子さん、いらつしやい。』（回數適宜。）

もう中には、花子さんの袂にとびつく者もある。お草履の上にのつかるものもある。

『おゝ、可愛い赤ちやんね。さあ〳〵、皆だつこしてあげませう。』

だつこしていたゞいて、お花の一寸法師大喜び。御門をくゞつて中に入ると、どこもかしこもきれいなこと、きれいなこと。きれいな一つのお部屋に休んでゐると、今度はピカ〳〵光る金の帽子をかむつて、きれいな五つの首飾をしたお花の神樣が出ていらつした。

『花子さん、よくいらつしやいました。この間はどうも有難う御座いました。今日は一日面白く遊んで頂戴。さあ、皆んな一緒にお花の踊をみせて上げませう。』

するときりぎりすさん、大きなバイオリンを奏き出すと、皆な一緒に、

花子さんはいゝ子だ、大すきだ。
仲よく皆で踊りませう。

と踊り出した。踊がすむと、

『さあ、これから御馳走にしませう。』

甘いおいしいお花のお菓子を、澤山いたゞきました。大變面白かつた花子さん、

『あのね、神樣、父ちやんや母ちやんが、心配するといけないから、今日はこれで歸りませう。』

『さう。では今日は之でおしまひ。これから何日いらつしやい。待つてゐますよ。

『ありがたう。また面白く遊んで頂戴。神様、左様なら。皆さん、左様なら。』

すると大勢のお花の一寸法師、

『毎日いらつしやいよ。左様なら。』

『きつと明日もね　左様なら。』

『左様なら。』

『左様なら。』

御門の外まで送つていたゞいて、花子さんお家へ歸りました。

それからも花子さん、幼稚園から歸つてくると、毎日お花の家へ遊に行きました。おしまひ。

蝶々のをどり

注意
- 主眼點　蝶々を助けて、そのお禮をして貰つた話。
- 時間　十分。
- 其他　愉快に話すこと。

○枕

皆さんは蝶々さんが好きでせう。白い蝶、黄色い蝶が、きれいな花の咲いてゐる時、ヒラ〳〵ヒーラヒーラと飛んでゐますね。今日はその蝶々さんの面白いお話をしませう。

○本　話

春子さんはねえ、皆さんのやうに、小つちやい、可愛い〳〵お嬢さんでしたよ。皆さんのやうに、毎日幼稚園に行つてゐました。或日のこと、春子さんは

大きな聲を出して歌をうたひ乍ら、幼稚園から歸つてきました。

てる〳〵坊主、てる坊主、
あした天氣にしておくれ、
何時かのゆうべの空のよに、
はれたら銀のすゞあげよ。

大きな聲を出して、お家の戸をガラリ。お母さんの前に行つて、お手々をついて、

『母ちやん、たゞ今。』

といひますと、お母さんはお仕事をやめて、

『お歸り。おなかがすいたでせう。さあ、お菓子をあげますよ。』

『嬉しいわ、母ちやん、ありがたう。』

春子さんは、お母さんからお菓子を澤山いたゞいて、それをたべ乍ら、

『あのね、母ちやん、今日はね、てるてる坊主の歌を教はつたの。うたつてみませうか。』

『てるてる坊主の歌、面白さうね、歌つて御覽よ。』

春子さんは、可愛い聲を出して、

てる〳〵坊主、てる坊主、
あした天氣にしておくれ、
私のねがひをきいたなら、
ああまいお酒をたんとのまさう。

と歌ひますと、お母さんはニコ〳〵しながら、

『面白いわね。』

と仰やいました。

それから春子さんは、お緣先に行つて、きれいな繪本を見てゐましたが、し

ばらくするとお菓子もなくなつて、繪本もつまらなさうに、お庭に出て土いぢりを始めました。板片を持つてきて、土をかきよせて、お山をこしらつたり、おまんぢうをこしらつたりして遊んでゐました。

春子さんが、ひよつと向ふを見ると、お池の向ふの木の枝に蜘蛛の巣があつて、その蜘蛛の巣に、たつた今ひつかゝつたと見えて、白い蝶々が一つ、にげやうとしてバタ〳〵してゐます。春子さんはビックリして、

『あら、蝶々がかゝつてるわ。かあいさうに、待つてらつしやい。あたし今行くわ。』

そこらにあつた竹切れを手に持つて、走つて行きました。蝶々は一生懸命に逃げようとしてゐますけれど、くものあみが強いので、バタ〳〵してゐます。

春子さんは、早速その竹切れで、手を伸ばしてくものあみをはたき落しました。それから手に取つて、きれいにくもの糸をとつて、蝶々を逃がしてやりました。すると蝶々は、いかにもうれしさうに、ヒラ〳〵と飛んで行きました。

『あれ〳〵、あんなに高くあがつたわ。もう見えなくなつたわ。』

春子さんは、いいことをしたので、うれしさうにまた土いぢりをはじめました。

それから二三日後のことです。あつたかいお縁先で、何時ものやうに　春子さんが日向ぼつこをしてゐますと、白い蝶が一つ、春子さんのところに飛んできました。

『春子さん、こなひだはありがたうございました。今日はそのお禮に、私たちのお家に參りませう。』

と蝶さんが言ひました。

『まあ、蝶さんのお家つてあるの？』

『えゝ、ありますとも。お父さんや、お母さんや、姉さんもゐますよ。そして皆春子さんを待つてゐますよ。』

『まあ、お父さんやお母さんがゐらつしやる？』

『えゝ、皆で待つてゐます。早く一しよに參りませう。』

『まあ、私嬉しい。蝶さんのお家つて早く行つてみたいわ。』

春子さんは、それは／＼大喜び。蝶さんと一しよに、きれいな赤や青や白い花がたくさん咲いた中を通つて、蝶さんのお家につきました。

蝶さんのお家は、花がたくさん咲いた中にあつて、それは〳〵きれいです。お家へ着くと、お父さん蝶や、お母さん蝶や、姉さん蝶がお家の前に出てきて

『まあ、春子さん、よくいらつしやいました。さあ、どうぞお上り下さい。』

といつて、皆で春子さんをお座敷に案内しました。お父さん蝶とお母さん蝶が春子さんに、

『こなひだは、家の子供があぶないところをありがたうございました。今日はお禮に御馳走を致しませう。』

と言つて、春子さんが今迄たべたこともないやうな、おいしいお菓子を色々と持つてきました。金平糖のやうなお菓子、ゼリビンズのやうなお菓子、チョコレートのやうなお菓子が、たく山春子さんの前にならびました。春子さんは大喜びで、

『珍らしいわねえ。これなあに？　これなあに？』

と言つてたべてゐました。

そのうちに、お母さん蝶が、

『春子さん、たゞ今からあちらで蝶々のをどりをしますからいらつしやい。』

春子さんはもうすつかり嬉んぢやつて、

『まあ、うれしい。蝶さんがをどるの？』

廣い〳〵お室には、きれいな花がたくさん飾つてあつて、たくさんな蝶々がヒラ〳〵と舞つてゐます。お室の隅の方には、蝶々が歌をうたつてゐます。

春子さんは手を打つて、

『きれいだねえ、かあいわね。』

するとその中から、蝶々が一人出てきて、

『春子さん、いらつしやい。一しよにをどりませう。』

たくさんの蝶々は、春子さんを眞中にして面白いをどりをします。春子さんも手をあげたり、足をあげたりしてをどりました。

春子さんは、蝶々のをどりを見せてもらつて、歸りには、珍らしいお土産をたくさん貰ひました。お父さん蝶や、お母さん蝶や、姉さん蝶や、そのほかお友だちの蝶が、皆で途中まで送つてくれました

『では春子さん、さよなら。またいらつしやいね。』

『ありがと。また來ますわ。さよなら。』

春子さんはお家に歸つて、お父さんとお母さんに、蝶々のお家に行つて面白かつたことをお話しますと、お父さんはかあいゝ春子さんの頭をなでて、

『これからもいいことをするんだよ。』

と仰やいました。お母さんは、

『小さなものはかあいがるんですよ。』

と仰やいました。

春子さんのお話は之でおしまひ。

花ちやんの兎

注意

主眼點 花ちやんはおとなしい良い子であつたからたくさんの兎なもらひました。三郎さんの樣にいたづらをしてはいけないといふ事がわかればそれで十分です。

時間 約七分。

注意 ヂエスチユアは出來得る限り多くし、音樂はたえず子供の心ををどらせる樣、輕い明るい氣分でなすこと。

○枕

今日は花ちやんの兎さんのお話。

○本話

花ちやんはお年が五つで、お顏が圓くぽちやぽちやこえてゐる。三郎さんは六つではなたらしのいたづらもの。花ちやんがお緣側で大きなまりを、

『ひとつ、ふたつ、』

とおもしろくついて遊んでゐました。それをみつけた三郎さん、
『おーい。花ちやんはまりつきなんか下手だなー。』
『いゝわよ。あたいいくつもつけるわ。』
『うそだよ。ちつともつけやしないよ。』
『つけるわよ。いくらでもつけるわよ。』
『そんならついてごらんよ。』
花ちやんは大きなまりを手に握つたまゝ、圓い目をぱつちりあいて、三郎さんを見てゐてつかうともしない。
『そら見よ。つけないや。あゝをかしい。』
『わたし……』
『よう、花子の下手蟲。大下手やーい。』
大きな聲をして三郎さんは花ちやんを苛めました。花ちやんは悲しくなつて

『アーン、アーン。』
と泣き出しますと、三郎さん駈けながら、
『花子の泣蟲、やーい。』
三郎さんは表へ飛んで行つてしまひました。花ちやんは縁側に立つて相變らず泣いてゐました。すると玉が、
『ミャーン、ミャーン。』(可愛らしいやさしい聲で。)
と近よつて來ました。そして何かほしさうに、花ちやんの足に頭をなでつけました。花ちやんは、仲よしの玉が來たので、泣くのをやめました。
涙のお目々をお手々でこすつて、そのお手々で玉をなでると、玉は小さい舌を出して、ペロ〳〵と花ちやんのお手々をなめました。
その時表の方で、
ドン、ドン、ドン、チン、チン、チン、

ドンチン、ドンチン、ドンチンチン、
ドンドン、チンチン、ドンチンチン。

と飴屋の音がしました。

花ちやんは飴屋さんが大好き。直ぐに草履をはいて表に出ました。

にこ〳〵のお爺さんは、何時もの樣に、赤や青や綠の旗を一杯車にかざつて、太鼓をたゝいてゐます。

ドンチン、ドンチン、ドンチンチン、
ドンドン、チンチン、ドンチンチン。

『あー、太郎ちやんも次郎ちやんもよつといで、
菊ちやん〻花ちやんもよつといで。』

花ちやんはもうすつかり元氣になつて、飴屋さんの車のそばへ駈けて行きました。

『をぢちやん、旗をちやうだいな。』

『あたいにもちようだいよー。』

近所の子供はみんな集つて來ました。ニコ〳〵のをぢちやんは、赤い旗や青い旗を一本づゝはい〳〵といつてくばりました。そして面白い歌をうたひながら、白い飴を手にのせました。

いろ〳〵にいぢつてそれを麥の管にさして、頰をプートふくらかし、手でもつて鳥の頭をつくり出しました。

『そーら、出來るよ、出來るよ。』

子供は大喜び。

『お猿さんが出來るよ。』

『やー、桃太郎さんだよ。』

『お人形ですよ。』

男の子も女の子も、目を圓るくして見てゐる。

をぢちやんは上手に手を動かして、とう〳〵鳥の形をこしらへました。

今度は筆をとつて、鳥のお目々を赤くかく。頭を赤くぬつて、足を黄ろくぬりました。

「さあ出來た、出來た。おぼつちやん、お嬢さん、もつていらつしやい。」

「をぢちやん、僕にちやうだいね。」

と一番先手を出したのはいたづらの三郎さん。

三郎さんは鳥を買つて、見てゐる間にみんなむしや〳〵たべて了ひました。

「やあ、まぼつちつやんはもうおたべかい。……さあ、おいしい飴屋だ、飴屋だよ。」

ドンチン、ドンチン、ドンチンチン、

ドンドン、チンチン、ドンチンチン、

又をぢちやんははやし出しました。はやしながらをぢゝやんは、又飴をねつてこしらへ出しました。

「今度はあたいよ。」

「をぢちやーん、今度はモウ〳〵の牛さんをこしらへておくれよ。」

「をぢちやーん、今度はミヤン〳〵の猫をこしらへてちようだいよ。」

「をぢちやーん、今度はワン〳〵の犬をこしらへておくれよ。」

「よし、よし、みんなこしらへてやるよ。さ、今度はお行儀の良い人にこしらへて上げるよ。」

見てゐるまに長いお耳が二つ、可愛いお目々が二つ出來た。そして長い足が二本、短かーい足が二本出來た。

「さあ、何でせう？……さう、兎さんですね。」

可愛らしい兎さんは、花ちやんがいたゞきました。

おとなしい花ちやんは、三郎さんの樣に直ぐにはたべませんでした。

大事に大事にして花ちやんは、お家にもつて歸りました。竹の棒の先に出來た兎さんをもつて、花ちやんは大喜び。

『あら、うれしいわ。ほんとに可愛らしい兎さんね。』

この樣子を見た三郎さんは、急に兎さんがほしくなつて、

『花ちやん、一寸見せてごらん。いゝ兎だね。』

『いやだわ。三郎ちやんはたべるんですもの。』

『そんな事しないよ。いゝから見せてごらん。』

『いやだわ、いやだわ。』

いやがる花ちやんの手から、むりに兎をとつてしまひました。あまり力を入れたので、可愛らしい兎さんはつぶれてしまひました。三郎さんはそれをなげつけてにげました。花ちやんはつぶれた兎さんを拾つて、大事にしてその夜は枕元においてねました。

次の朝、花ちやんが眼をさました時には、可愛らしい兎さんがいくつも〳〵枕元にならんでゐました。

花ちやんは大喜びで、大事にしてそれをお友達に仲よくわけてやりました。

おしまひ。

白ちやんの鈴

注意
- 主眼點　白ちやんの鈴をとつたいたづらの猿が、ひどい目にあつた記。
- 時間　十分。
- 其他　いぢわるの猿と正直者の犬との性格の演出に、力をそゝぎたい。

お犬の白ちやん、首玉に鈴をつけると、

チン〳〵、チン〳〵。

「よくなるな。いゝ鈴だな。うれしいな。」

チン〳〵、よろこんで遊んでゐました。

すると向から、顔の赤いお山のお猿さんがやつてきた。

「おや、白ちやんが鈴をつけてるぞ。よくなる鈴だな。ほしいな、ほしいな、ほしいな。ようし、（ほしい心持から一つとつてやらうといふ氣持の出る調子で）一つとつて

やらう。』
悪い心を起すと、
『白ちやん、今日は。いゝ鈴をつけてるね。』
『やあ、お猿さん、今日は。よくなるでせう。ほら、こんなによくなるよ。』
白ちやん、うれしくて〳〵、チン〳〵〳〵ならして見せると、お猿さん、
『ほんとにいゝ鈴だね。どら、一寸見せて御覽。おや、（犬の首に手をやつて鈴を見る身振）金の鈴だね。』
立派だね、立派だねといつて鈴をみてゐる中に、ポツリ、鈴の糸をきると、一生懸命かけ出した。白ちやんびつくり。
『お猿さん、それは僕の大事なんだから、ね、待つて頂戴』
お猿さん、そんなことはかまはないで、どん〳〵どん〳〵かけていく。後から白ちやん、一生懸命。（駈ける身振）

『待つて頂戴。かへして頂戴。』
おひつかれては大變と、お猿さんも一生懸命。白ちやんもやつぱり後から一生懸命。白ちやんもう少しといふ所へくるとお猿さん、高い木の上へ、スルスル〳〵とかけ上つた。所が、白ちやん上れない。恨めしさうに上を見ると、お猿さん、鈴をチン〳〵チン〳〵ふりながら、
『やーい、こゝまでおいで、こゝまでおいで。チンーーチン〳〵。』
『ね、お猿さん、かへして頂戴よ、ね。』
『あかめー。』（身振。）
『大事なんだからかへしてよ、ね。』
『あかめー。こゝまでおいで。チン〳〵、チン〳〵。こゝまでおいで。チン〳〵、チン〳〵。』
ワン〳〵の白ちやん、とう〳〵ワン〳〵ワン〳〵泣き出した。お家の方へワ

ン〳〵ワン〳〵泣きながら歸つて行くと、お友達の黑ちやん、
『白ちやん、どうしたの。いたづらの坊ちやんにたゝかれたの。』
『ん、ん。』（首を振る。）
『ちやお腹でもいたいの。』
『ん、ん。ワン〳〵、ワン〳〵。』（泣き聲。）
『一體どうしたのさ。泣いてゐちやわからんよ。ね、どうしたの。』
『お猿さんがね、僕の大事な鈴をとつてかへさないの。』
『鈴をとられた。わるいお猿さんだね。』
『ほら、見えるだらう、あの高い木の上に。』
『あゝ、見える〳〵。あのお猿さんが鈴を。わるいお猿さんだな。』
『いくらいつてもかへさないんだもの。ワン〳〵、ワン〳〵。』
『おゝ、泣くんぢやないよ。ね、泣くんぢやないよ。あ、いゝ事があるよ。お猿さんはね、お芋がすきだらう。お芋をもつていつて、かへつこしてもらはう。大丈夫だよ。ね、泣くんぢやないよ。さあ、お芋を持つて來よう。』
黑ちやんに白ちやん、お芋を一つ宛もつてくると、お猿さんの木の下へやつて來た。お猿さんは、
『いゝ鈴だな。チン〳〵〳〵。よくなるな。』
チン〳〵チン〳〵、ならしてよろこんでゐる。
『お猿さん、ほらお芋だよ。おいしいよ。』
『お芋？　おや〳〵、おいしさうだな。』
『そりやおいしいよ。その鈴とかへつこしようよ。』
『おいしさうだな。食べたいな、食べたいな。ほしいな。ようし、かへつこしよう。』
『かへつこするかい。有難う。』

『ちやね、一二の三でお芋を投げるんだよ。』
『投げるからね、一緒に鈴を投げて頂戴』
『ようし、一二の三。』
ポンと白ちやんお芋を投げると、お猿さんヒヨイと受取ると、
『鈴はあかめー。おいしいお芋だな。』
お口の中がお芋で一杯。モツクリ〳〵食べだした。
一お約束だつたよ、お猿さん、投げて頂戴』
『あかめー。もう一つよこさなきやあかめー。』
仕方ないので白ちやん、
『ちやね、黒ちやん、もう一つやつて頂戴』
『こんどはきつとだよ。』
一二の三。ポンと黒ちやん投げると、お猿さんヒヨイと受取ると、やつぱり

『あかめー。』
『そんなこと云はないで、かへして頂戴よ。』
『あかめー。おいしいお芋を二つも有難う。おいしいな。』
モツクリ〳〵。
『やーい、だまされた、やーい。こゝまでおいで、チン〳〵チン〳〵。こゝまでおいで、チン〳〵チン〳〵。』
ワン〳〵の黒ちやんも白ちやんも、くやしくなつてワン〳〵ワン〳〵泣きだした。ワン〳〵ワン〳〵泣きながら、お家の方へかへつていくと、向から首の長い足の長い鶴の小父さんがやつて來た。
『黒ちやんに白ちやん、どうしたんだい。何、お猿さんが鈴をとつてかへさない。ん、お芋とかへつこした。ん、お芋だけとつてかへさない。さうか、それで泣いてるんだね。わるいお猿さんだな。』

『小父さん、鈴を取りかへして頂戴。』

『よし〳〵、なくんぢやないよ。ね、小父さんがとりかへして上げるよ。』

鶴の小父さん長い首をずつと伸して、グル〳〵グルッと見廻はすと、

『はゝ、あの猿だね。』

大きな羽をひろげて、バタ〳〵ッとやつたかと思ふと、スー、スー（翼をひろげて飛ぶ身振）と舞ひ上つた。

所がお猿さん、二つお芋を食べるとお腹が一杯になつて、いゝ心持になつて、クークー眠り出した。鶴の小父さん、スースーと飛んで來て見ると、

『おや〳〵、猿の奴、よくねでるな。あゝ、鼻の下に何か出して。おや、よくねてゐるな。よーし、この時だ。』

そつとお猿さんの側へ行くと、長いお口で鈴の糸をチョッとくはへて、ッッと取るとバタ〳〵〳〵ッ。バタ〳〵〳〵といつたのに目を覺したお猿さん、見ると鶴の小父さん、鈴をチン〳〵チン〳〵ならしながら、スー、スー、

『鶴の小父さん、それ僕の大事なんだよ。かへして頂戴、かへして頂戴。』

『こゝまでおいで、こゝまでおいで。』

スー、スー。お猿さん追ひかけようと、木につかまつてゐた兩方のお手をはなした拍子に、眞さかさまに下へドシン。お尻をドシーンとぶつたから、

『いたい！』

之を見ると、黑ちやんも白ちやんも、

『萬歲！』

『萬歲！』

お猿さん、お尻をおさへて、

『いたい〳〵』

黑ちやん、白ちやん、鶴の小父さん、大喜び。聲をそろへて、

『やーい、お猿さん、やーい。こゝまでおいで。』

チン〳〵、チン〳〵。

『こゝまでおいで。』

チン〳〵、チン〳〵と笑ひました。おしまひ。

犬と鶏

注意（主眼點　鶏が卵を狐に取られた。それを、友達の犬が取った話。
時間　七八分。）

大きな山がありました。その下にきれいな川が流れて居りました。川のこちらに、こんもり茂つた林がありましたよ。その中にね、これつばかしのお家がありましたよ。誰のお家だらう。おやゝ？　門の外に羽が一枚出してありますよ。あゝ、鶏さんのお家だ。うん、聞える〳〵。（更に手を當てゝ聞く態度。）お父さん鶏が一羽。お母さん鶏が一羽。ひよ子さんは？　一羽もゐないんですよ。

鶏さんのお家のこつちの隣にも、これつばかりのお家が一軒、おや〳〵、首輪がかけてありますよ。あゝ、わかつた。ワン〳〵さんのお家だ。うん、聞える〳〵。ワン、ワン、あゝ、ワン〳〵さんが一人ゐますよ。

おや？　あの川の向ふにも家が一軒見えますよ。おや〳〵、表の戸の所から太い尻尾が出てゐますよ。あゝ、わかつた。きつとあれは狐のお家だ。

或日のこと、ワン〳〵がお家の中で、グウ〳〵晝寢をしてゐるとね、お隣の鷄さんのお家で、俄にコカッコッコ、コカッコッコ。ワン〳〵がびつくりして表へ飛出してみると、お隣のお父さん鷄が、

「コカッコッコ、嬉しい〳〵、コカッコッコ。」

『何がそんなに嬉しいんですか。』

「嬉しい〳〵、コカッコッコ、卵が生れた、コカッコッコ。」

「あゝ、卵が生れたんですか、それはどうもお目出度う。」

その翌日のこと、ワン〳〵がお家の中で、グウ〳〵、グウ〳〵晝寢をしてゐるとね、又お隣の鷄さんのお家で大騒ぎ。何だらうかと飛出してみると、隣のお父さん鷄が、

「コカッコッコ、嬉しい〳〵、コカッコッコ。」

「おや？　又嬉しいつて、何がそんなに嬉しいんですか。」

「嬉しい〳〵、コカッコッコ、卵が生れた、コカッコッコ。」

「あゝ、又卵が生れたんですか。それはどうもお目出度う。」

その翌日のこと、又ワン〳〵がお家の中で、グウ〳〵、グウ〳〵晝寢をしてゐるとね、又お隣の鷄さんのお家で大騒ぎ。何だらうかと飛出してみると、隣のお父さん鷄が、

「コカッコッコ、嬉しい〳〵、コカッコッコ。」

「おや？　又嬉しいつて。あゝさうだ、きつと又卵が生れたんでせう。」

「生れた〳〵、コカッコッコ、卵が生れた、コカッコッコ。」

それでワン〳〵が、鷄さんのお家へ入つて見るとね、お母さん鷄のお部屋に白い卵がある。ある〳〵、一つ、二つ、三つありますよ。お母さん鷄も嬉しさ

うに、

『ク、ク、ク、ク、』

とその邊を歩き廻つて居ります。

ワン〳〵が、お母さん鷄にね、

『お目出度う、お目出度う。どつさり産みましたね。』

『え、、産みましたよ。これからまだ産むんです。明日も、明後日も。もつともつと澤山産んでね、抱つこをしてやつて、可愛いひよ子にするんですよ。』

その翌日も産みました。その翌日も産みました。毎日々々々産んでね、とうとう十になりました。さあ抱つこをして溫めませうと、鷄のお母さんが、暖い着物を用意してゐると、それを見つけたのが川向ふの狐さん。

『あ、鷄さんがいゝ卵を持つてゐるよ。おいしさうな卵をどつさり持つてるよ。一つほしいねえ。』

とう〳〵惡いことを考へました。川をポイと飛越えると、鷄さんのお家へやつて來た。來てみると、父さん鷄は何處かへ用事に出てゐて、母さん鷄たつた一人。これは丁度いゝ。

『今日は、いゝお天氣ですねえ、鷄さん。おや〳〵、澤山卵があるんですねえ。もうひよ子が出來るんですか。』

『はい、これから溫めようと思ふんです。』

『これから？　その着物を着てゞすか。』

『はい、この着物で。』

『それは鷄さん駄目ですよ。そんな寒さうな着物ではきつと駄目ですよ。一月たつても、二月たつても、ひよ子は出はしませんよ。』

『駄目でせうか、この着物では。困つたなあ。』

『鷄さん〳〵、いゝ事がありますよ。これ〳〵、御覽なさい。（自分の着物を見せて）。

僕はこんなに暖い着物を着てるんですよ。ねえ鶏さん、僕が代りに解してあげませう。きつと一日か二日で出ますよ。」

「え！　狐さん、ほんとに代りにやつて下さる？　ほんとに？　ほんとに有難う、有難う。」

とう〳〵だまされてしまひました。お母さん鶏は、卵の籠を狐に渡してしまひました。

後へ歸つて來たお父さん鶏。その話を聞いてびつくりしてしまひました。これは大變だといふので、表へ出て大聲でコカツコツコ、コカツコツコと鳴きました。

いつもの通りにワン〳〵がお晝寢をしてゐるとね、お隣が大騒ぎ。何だらうかと出てみると、

「コカツコツコ、コカツコツコ。卵を取られた、コカツコカツコ。」

「えー　卵をとられた？　誰に取られたんです。」

「コカツコツコ、狐に取られた、コカツコツコ。」

「狐？　狐？　よし！　僕が取かへして來てあげませう。」

ワン〳〵は、いきなりビユーッと駈け出しました。どん〳〵駈けて、川を一飛びにビユーッ！　狐のお家の戸をつき破つて、お部屋の中までビユーッ！

取つて來た卵を御馳走にならうと思つてゐた狐さん大びつくり。いつもこはい〳〵と思つてゐるワン〳〵がやつて來たのですから、卵も何も彼もそこに捨てゝおいて、裏の戸を破つてビユーッ！　高いお山を一飛びにビユーッ！　どんどん逃げてしまひました。

卵を取かへして頂いたので、鶏のお父さん大喜び。鶏のお母さんも大喜び。

「コケツコツコ、コケツコツコ、嬉しい〳〵、コケツコツコ。」

それから卵を溫めて、たくさんのひよ子が生れました。おしまひ。

兎と家鴨

注意
- 主眼點　可愛がられてゐた家鴨が叱られた話。
- 時間　八分。
- 其他　擬聲をはつきり、説明文の所をゆつくり。

みよ子ちやんのお家の裏には、うつくしい水の一杯入つてゐる綺麗なお池がありました。そのお池の中には、白いのや、黑いのや、青いのや、赤いのや、いろんな美しい鯉がたくさん泳いでゐました。そして水の上には、首がこんなに曲つた（右手であひるの首の格好）あひるさんが、ガア、ガア、ガア、ガア、いひながら泳いでゐました。

みよ子ちやんは、このあひるさんと大の仲好し。朝目がさめるとすぐ、

「あひるさん、こちらへおいで。」

すると、三匹も四匹もゐるあひるさんが、

「おや、みよ子ちやんはもうお目覺めだよ。みよ子ちやん、お早うございます。ガア、ガア、ガア、ガア。」

とすぐ寄つて來る。

みよ子ちやんが幼稚園から歸つて來ると、

「アッ、もうお歸りだ。みよ子ちやんお歸りなさい。ガア〳〵ガア〳〵。」

と寄つて來る。

毎日一所になつて面白く遊んで居りましたが、その中にみよ子ちやんの所へ兎さんが來ることになりました。

或日、田舍のをばさんがいらつしやつて、

「みよ子ちやん、いゝものをあげませう。ほら、このうさちやん。このうさちやんはね、こんどをばさんのお家で生れたんですよ。可愛らしいでせう。みよ子ちやんへのお土產が、何にも好いものがなかつたから、このうさちやんを持つて來たのですよ。」

「をばさん、どうもありがたう。」

「うさちやんをね、一匹ならいゝんだけれども、二匹でせう。だから籠の中へいれて來たんです。するとね、電車の中でうさちやんが、籠からピョーイと飛び出しちやつたの。をばさん困つてるとね、お隣りに坐つてらしたよそのをちさんが、捉へて下さつたの。さ、みよちやん、うさちやんと一緒にお遊びなさい。」

みよ子ちやんは大喜びで、裏のお庭へ出て來ると、うさちやんと一緒に遊びました。

「うさちやん、あんたがたお腹がすいてゐるでせう。あんたがたは一體何をたべるの。」

すると兎ちやんが、

『有難うございます。わたし達はなんかの葉つばが喰べたいんです。』

『さう、何の葉つばでもいゝの。ぢやあ待つてらつしやい。今取つて來ますからね。』

みよ子ちやんは、お臺所へ行つて葉つばを貰つて來やうと思つて、かけ出して行きました。

うさちやん達は、赤いクル〳〵した可愛いお目々で、お庭を珍らしさうに見てゐました。弟のうさちやんが、

『兄さん、隨分廣いお庭だね。お池もあるよ。お池の中には家鴨が游いでゐるね。こゝで遊ぶのは面白いだらうなあ。』

『うん、面白さうだね。そしてみよ子ちやんはいゝお嬢さんだから、僕等はうれしいなあ。』

『ほんとにうれしいなあ。』

話あつて居りました。

向ふのお池の上では、家鴨さん達が面白さうに游いだり、水にもぐつたりして居りましたが、小さな家鴨が、

『お母さん、お庭に兎さんが居るよ。』

『おや〳〵、いつ來たんだらう。可愛らしい兎さんだね。二匹居るね。これはいゝお友達が出來ました。どんなに可愛らしいか見に行つて來ませう。』

みんな一所になつて、

『ガア〳〵〳〵。』

お池を上つて、うさちやんの方へ歩いて來ました。

『うさちやん、今日は、ガア〳〵〳〵。』

『うさちやん、今日は、ガア〳〵〳〵。』

『今日は、うさちやん、ガア〳〵〳〵。』

あんまりやかましいので、兎ちやんは驚いて、喧嘩でもしにきたのぢやないかと思つて、いそいでピョン〳〵〳〵と飛んで何處かへ逃げて行つてしまひました。

『なあんだ。臆病なうさちやんだね。つまらないや。さあ、またお池で遊んで來やう。ガア〳〵〳〵。』

みんな揃つてお池で遊んで居りました。

あら、みなさん、みよ子ちやんは何處へ行つたんでしたらう。えッ、さうですね。お臺所へうさちやんの喰べる葉つばを取りに行つたのでしたねえ。さうさう。

それでね、葉つばを持つてね、急いでお庭へやつて來たんです。すると兎ちやんが二匹とも居ないでせう。

『おや、兎ちやんはどこへ行つたんだらう。二匹とも居やしないわ。どこへ行つたんでせう。』

そのあたりをズーッと探したけれども見つからない。

『兎ちやん、兎ちやん、どこへ行つたの。兎ちやん、兎ちやあん。』

するとお庭の隅の草の中から、

『みよ子ちやん、こゝです。みよ子ちやん、こゝですよ。』

『あら、そんな所に居るの。』

かけ出して來て見ると、

『あら、どうしてこんな所に居るの。あつたかいから?』

『いゝえ、今ね、お庭の家鴨さんが、あたし達の側へやつて來て、ガア〳〵〳〵ガアやかましくてしやうがなかつたので、逃げて來たんです。』

『おや、さう。あひるさん、いけないわねえ。あたし後で叱つてやるわ。さあ、

向ふへ行きませう。葉つばをこんなに持つて來たのよ。だからあちらでおあがりなさい。』

またみち子ちやんは、兎ちやんを連れてお庭の眞中へ來ると、

『さあ、よあがりなさい。おなかがすいたでせう。』

『有難うございます。ではいたゞきます。ムニヤ〳〵〳〵。』

おいしさうに喰べ出しました。

お池の家鴨さんがそれを見て、

『おや、また兎さんがやつて來たよ。もう一遍見に行つて來やう。ガア〳〵〳〵ガア。』

やつて來ました。

それを見ると、みよ子ちやんはいそいで家鴨さんの方へやつて來て、とほせんぼをしてしまひました。

『あひるちやん、あんた達は兎ちやんのそばへ行つちやいけないわよ。ガアガア〳〵〳〵いつてやかましいつて。これからは大きな聲でガア〳〵いつちやいけないわよ。あつちへいつてらつしやい。』

叱られた家鴨さん達は、

『はい〳〵、もうこれから大きな聲は出しません。』

小さな聲でガア〳〵鳴きながら、お池の方へかへつて行きました。

盥のお舟

注意

主眼點 兄さん達に取り殘された次郎ちやんが盥のお舟で汐干狩に行つてはまぐりをたくさん取つた話。

時間 九分。

其他 次郎ちやんの場面と兄さんの場面とのうつる所を手際よく話すこと。

次郎ちやんのお家のすぐそばに大きな川があつて、その川を少し下つていくと大きな海がありました。

ある日、次郎ちやんの兄さんが、

「次郎ちやん、僕等はね、今日海へ貝をとりにいくよ。しほひがりにいくよ。」

「兄さん、僕もつれてつて頂戴な。」

「駄目だよ、お前なんか。連れてつたつて貝を拾ふことが出來ないから駄目だ

よ。』

『僕拾へるんだから、連れてつてよ。』

『駄目だよう。』

その中に兄さんのお友達が大勢來て、一所になつて出かけていきました。川の所へ來ると、みんなポートに乘りました。

『兄さん、僕も連れてつてよう。』

『駄目だよ。もう乘れないんだから。』

『さあ、みんなで漕ぐんだよ。一、二、一、二。』

ポートを漕ぎ出しました。

『次郎ちやん、お前はね、ポチと一緒に遊んでる方がいゝんだよ。僕等行つて來るよ。一、二、一、二。』

ポートは下の方の海の方へ行つてしまつた。

『いゝやね、ポチ、僕等も二人でしほひがりに行つて來ようや。』

『えゝ、私達だけで行きませう。』

それから次郎ちやんとポチは、お家へかへつて盥を持つて來た。それを川に浮べて、

『さあ、ポチ、乘るんだよ。いゝかい。アッ、あぶない。おつこちちやいけないよ。さ、その竿を貸しておくれ。ワッショ、ワッショ。』(竿にて水をかく身振。)

盥のお舟は、ドンブラコ、ドンブランコと浮いて行く。

『面白いなあ。早く海へくるといゝなあ。ワッショ、ワッショ。』(身振同前。)

ドンブラコ、ドンブラコ。

その中に海へ出ました。

『さあ、こゝらで降りて貝をさがすことにしよう。やあ、遠くまで水がなくなつてゐるなあ。水のふえて來ない中に早く貝を取らうよ。』

『坊ちやん、坊ちやん。』

『何だい、ポチ。』

『向ふをごらんなさい。兄さん達が一生懸命でさがしてゐますよ。貝が見つからないで困つてますね。私達の方がたくさん取りませうよ。』

『よし〳〵、兄さん達よりもたくさん取つて歸らう。』

それから次郎ちやんとポチとは、貝をさがし出す。

『坊ちやん。こゝを堀つてごらんなさい。はまぐりがありさうですよ。』

『さうかい。よし〳〵。よいしよ、よいしよ。』（鍬で掘る身振。）

小さな鍬で掘つて見ると、

『ヤッ、あつた、あつた、はまぐりがあつたよ。』

『坊ちやん、こゝへ來てごらんなさい。この中にもありさうですよ。』

また掘つて見ると、

『ヤッ、またあつた。やつぱりはまぐりだ。大きいなあ。』

『坊ちやん、こゝにもありさうですよ。』

ポチと二人ではまぐりをたくさん取つて居ました。

兄さんは、お友達と一緒になつて、あちらこちらと一生懸命堀つて見てもなかなか見つからない。

『こゝにありさうだね。こゝを一つ掘つて見やう。』

ヨイショ、ヨイショ、掘つて見ても何にも出て來ない。

『ヤッ、こゝにありさうだぞ。』

掘つて見るがやつぱり出て來ない。

あつちを掘つたり、こつちを掘つたりしても中々見つからない。

その中に一人のお友達が、

『オイ〳〵、君の家の次郎ちやんが向ふに來てゐるよ。』

『何處に。あッ、ほんとだ。そしてたくさん貝を拾つてるね。よし〳〵。次郎に負けちやあいけないから、一生懸命でさがさうよ。』

またそれから、あつちを掘つたり、こつちを掘つたりしたけれども、どうしても見つからない。

その中に、だん〳〵日が暮れ出したので、

『もう歸らうや。』

お舟の所へ來て見ると、さあ大變、水がたくさんになつて來ないものだからボートが動かない。

みんな一緒になつて、

『ワッショイ、ワッショイ。』

と押すと、少しづゝ動く。

『ワッショイ、ワッショイ。』

と押してゐました。

次郎ちやんはポチと二人で、はまぐりを籠に一杯、こんなに取つて大喜び。

『さあ、ポチや、もう歸らう。おや、まだ水がふえて來ないなあ。あそこの水のある所まで盥をころがしていかう。』

二人で盥を、ゴロン〳〵〳〵〳〵轉して來て、水の上へヂャブン。

『さあ乘つて歸らう。』

『坊ちやん、竿はこゝにありますよ。』

『ポチ、ポチ、向ふを御覽。兄さん達は、ボートが動かないものだから、一生懸命で押してるよ。僕等は先に歸らう。』

『さあ、ポチ、乘るんだよ。よし。僕も、どつこいしよ。さあ、漕ぐよ。』

ワッショ、ワッショ。(舟を漕ぐ身振同前。)

『坊ちやん、今日はたくさんはまぐりがとれましたね。』

『うん。お家へ歸つてお母さんを驚かしてあげようね。』

ワツショ、ワツショ。

盥のお舟はどんぶらこ、どんぶらこ、と浮んでいく。

盥のお舟はどんぶらこ、

はまぐりたくさんどんぶらこ、

どんぶらこ、どんぶらこ。

お猿さんの失敗

注意

主眼點　全體として無邪氣に書きました。强ひて主眼點をつけると、如何に猿が小賢しくとも、矢張り人間の子供にも及ばない。人間の優越せる點を知らせたい。

時間　五分。

其他　話しと歌との續きを圓滑にしたい。樂器で伴奏(助奏)するなら、よくこの氣合の調和する樣にして欲しい。

○枕

私の田舍は、大きな山の、又山の、又その山の中で、いろ〳〵な鳥や、兎や、猿や、なんでも居ます。其の中に一匹、大きなお猿さんが居りました。それは〳〵お悧悋さんで、ご飯もこぼさずに上手に食べます。赤ちやんのお守りなどはそれは〳〵上手です。

ねん〳〵ころりよおころりよ、
おころり小山のねんころり。
と唄ひますと、どんな赤ちやんでも、すぐスヤ〳〵と寢込んで終ひます。
こんな悧悋なお猿さんでも、ある時こんな失敗をしました。

○本　話

もうそろ〳〵遠くのお山には白い雪が見えて、風のお婆さんがブー〳〵〳〵吹いて、赤くなつたり黄色くなつたりした木の葉が、
散るよ〳〵、
木の葉が散るよ。
風に吹かれて、
木い葉が散るよ。
ヒラ〳〵ヒラ〳〵、
ヒーラヒラ。（新作唱歌第二集、梁田氏曲借用。）
落ちた木の葉は、お家の庭や小さい川の中へ沈みます。すると山の間の小川のお魚達は、寒くなりますから、
『これは好いお布團だ。どれ、私も這込つてねんねしませう。』
みんなもぐつて、寒い時はねんねしてゐます。
悧悋なお猿さん、今日はおいしい柿をとつて食べやうと、いつも山道を下りてきますと、下の方の谷川で、
『ザブン、ジャー〳〵〳〵。』
『ヤッ！　こんな大きなお魚が。』
『まあ、たくさんとれたわね。』
何だらうと、樹の間から見ると、（すかし見する樣子）村の子供が二三人で、棒の

先きに網をつけて、頻りと小川の中の木の葉をすくつてゐます。

『ジャブン、ジャー／／／／。』

『アッ！　今度はこんな大きいの！』

お魚はビン／／はねながら、籠の中へ入れられます。

暫くしてそろ／／と夕方になりました。澤山に捕つた小供達は、重さうにお家の方へ歸つて終ひました。

それをいつまでも、ぢつと樹の蔭から見てゐましたお猿さん、

『ヨシ／／、うまい事がある。人間の子供なんて馬鹿なものだ。僕なら一度にあの位のお魚を捕つて見せる。』

と獨語を言つてゐましたが、さつき小供達の歸つて行つた方へ行つて、深さうな、お魚のたんと居さうな處をさがしました。

もうだん／／暗くなります。寒い北風は、お猿さんのお手々やあんよがちぢむ樣に吹きます。（手足を縮めて寒い樣子をする。）

お猿さんは何を考へたのでせう。どうするつもりでせう。（少し間を置いて聽衆を見廻す。）

川の上に柳の木が一本乘り出してゐました。お猿さんはその柳へ飛びつきました。兩手で確り木を抱いて、（兩手で抱いてだん／／身を下げる樣子）長い尾をお魚のゐる水の中へ入れました。お魚はみんなでお顏を出して見ます。

『ヤア、何だか木の葉よりも溫かさうなお布團が來たぞ。ヤア、もつと上等な毛布がきたぞ。』

『溫かさうだ。這入れ／／。』

『みんなこい／／、出てこい／／、みんなこい。

冷い木の葉の
お布團よりも、
ホカ〳〵毛布へ

もぐりこめ〳〵。（文部省尋常小學唱歌卷一、池の鯉曲借用。）

お猿さんは、ソーッと覗いて見ると、大きいお魚や小さいお魚が、此方からも彼方からも、お唱歌を歌ひながら、尾の毛の中へもぐりこんでゐますから、嬉しくて〳〵なりません。少し位くすぐつたくてもがまんしてゐます。

だん〳〵あたりが暗くなります。山の向ふのお寺の鐘が、ボーンとひゞきますと、（鐘をつく樣子）すつかり寒くなつて終つて、水の上に氷がはり始めました。

お猿さんは、がまんするのは今だ。冷くはないぞ。今にこの川中のお魚を一遍に引き上げて、天ぷらにして食べてやる。今少し、今少し（齒をかんでこらへる樣子）と耐へてゐる中に、尾の生へてゐる處がちぎれる樣になりました。見ると（抱いてゐた手を片手離して後をのぞく）すつかり氷がはりつめてゐます。（少しお尻を動かす。）

『オヤッ！』

『オヤッ！　オヤッ！』（力を入れて拔かうとする樣子。）

『さあ、大變、ウー〳〵〳〵。（兩手で樹をつかみ更に力を入れる。）

『あゝ、あゝ〳〵、お魚、少し待つといでよ。』（下を見て。）

『ソラ、ウーン！』（滿身の力を入れる樣子。）

ポキン！（拍手、尾の切れたる樣子、尾の附根をなでがつかりした樣子。）

お猿さんは泣きながらお家へ歸りました。

○結

矢張りお猿より人間の小供の方が怜悧でした。あんまり力を入れたので、今でもお猿のお顏は眞赤でせう。そして尾はあんなに短いんですよ。おしまひ。

うまい考へ

注意

主眼點 犬、猫、雞、馬が野原へ遊びにいつて、柿をたべた話。

時間 八分乃至十分。

其他 家を追出された犬、猫、雞、馬が盗人の家をおそつて、御馳走をたべた話はよく話されますが、その話に不滿をいだいて改作したのがこの話です。

お日様がずつとお上りになつて、ニコ〳〵ニコ〳〵笑ひながら、

『さ、さ、皆起きるんだよ。』

キラ〳〵キラ〳〵照していらつしやると、クー〳〵とねてゐた鷄さん、

『コケツコツコー。お日様、お早う。いゝお天氣だな。』

こつちのお隣のワン〳〵さんもとびおきる、

『ワン、ワン〳〵、お日様お早う。おや鷄さんもお早う。いゝお天氣だな。』

するとあつちのお隣のニャ〳〵さん、
『ニャ、ニャ〳〵。お日様、お早う。おや〳〵、鶏さんもお早う。いゝお天氣だな。』
今度は向ひのヒン〳〵のお馬さん。
『ヒーン、ヒンヒーン。お日様、お早う。おや〳〵、皆さんもお早う。いゝお天氣だな。』
皆目をさますと、
『いゝお天氣だな。』
『いゝお天氣だな。』
『皆で何處かへ遊びに行かうよ。』
『面白いな。遠足に行かう。』
『行かう、行かう。』

ヒン〳〵のお馬は、黒いピカ〳〵光るお靴をはいて出かけましたよ。ワンワンは首玉に、金のお鈴をつけてチン〳〵〳〵、チン〳〵〳〵。ニャ〳〵はきれいなよだれかけをあてて、コケコッコーの鶏は赤い帽子をかむつて出かけましたよ。
仲よく野原の方へやつて行くと、あつちのお山も、こつちのお山も、紅葉で眞赤。空ではお日様、
『皆仲よく遊んでおいで。』
ニコ〳〵ニコ〳〵照らしてゐらつしやる。
『暖かいな。面白いな。』
『きれいなお山だな。』
お馬が元氣よくヒーンとなくと、ワン〳〵も元氣にワーン。するとニャ〳〵がニャーン。一番おしまひに鶏さんがコケッコッコー。皆一緒に、

「ヒーン、ワン、ニヤン、コケツコツコー。
ヒーン、ワン、ニヤン、コケツコツコー。」
「面白いな。もつとやらう。」
「ヒーン、ワン、ニヤン、コケツコツコー。」
「あ、さうだ。一つお唱歌を歌つて行かう。」
「面白いな。お唱歌だ、お唱歌だ。」
すると又皆が口を揃へて、
秋空晴れて日は高し。
ヒーン、ワン、ニヤン、コケツコツコー。
愉快に今日は散歩せん。
ヒーン、ワン、ニヤン、コケツコツコー。
だん〳〵行くと大分つかれて來た。一番つかれたニヤ〳〵さん、

「皆一寸休みませうよ。」
「ようし、一休みしよう。」
「お休みだ、お休みだ。」
草の上にどつかり腰を下すと、
「あつたかいな。」
「きれいなお山だな。」
「面白いな。」
ところがワン〳〵さん、
「あーあ、お腹がすいた。」
するとヒン〳〵のお馬もニヤ〳〵もコケツコツコーの鶏さんも、
「あーあ、お腹がすいた。」
「何かないかな。お腹がすいたな。」

ワン〳〵さん、ヒヨイと向を見ると、

『おや、あるぞ〳〵。いゝものがあるぞ。ほら、あそこに木があるだらう。』

『や、柿がなつてるぞ。』

『澤山なつてるな。』

『おいしさうだな。』

『ぢや皆であの柿をとつて食べよう。』

ワン〳〵も、ニヤ〳〵も、ヒン〳〵のお馬も、コケコッコーの鷄さんも、急に元氣になつて、その柿の木の下に來てみると、高いこと〳〵。ワン〳〵も、ニヤ〳〵も、コケッコッコーの鷄さんもとゞかない。

『困つたな。高くてとれやしないや。高いな。』

『さう〳〵、お馬さんは隨分背が高いからとつて頂戴。』

『ようし、いくつでもとつてあげる。待つといで。』

ヒン〳〵のお馬さんがうんと足を伸して、うんと首をのばしたが、やつぱりとゞかない。

『困つたな。高いな。何かいゝ工夫がないかな。』

ヒン〳〵のお馬、長い首をあつちへひねつたり、こんちへひねつたり考へてゐたが、

『さうだ、いゝ事があるよ。僕のお背にね、ワン〳〵さんがのつかつてね、ワン〳〵さんのお背に、ニヤ〳〵さんがのつてね、ニヤ〳〵さんのお背に、雞さんがのるんだよ。』

『それはうまいや。』

『それはうまいや。』

『とゞいたらね、一番上の鷄さんが柿をちぎつて頂戴。』

『さあ、やらう。』

ヒン〳〵のお馬が草の上に、チヨコンとお坐りすると、お馬のお背にワンワンがのつた。その上へニヤ〳〵、その上へコケツコツコーの鷄さんがのつた。皆のつかると、一番下のお馬、

『いゝかい。高くなるよ。皆しつかりつかまつておいで。いゝかい。』

ヤツコラドツコイセ。長い足をずつと伸すと、とゞいた〳〵。おいしい柿がすぐとれるから皆大喜び。

『萬歳！』

『ヒーン、ワン、ニヤン、コケツコツコー。』

『萬歳！』

『ヒーン、ワン、ニヤン、コケツコツコー。』

『さあ、おいしい柿をちぎるよ。ほら、これはお馬さん。こいつはワン〳〵さん。こいつはニヤ〳〵さん。それからこいつは私の分。おまけにもつとだ。』

一つ、二つ、三つ、四つと澤山ちぎると、

『もういゝよ。お馬さん、下して頂戴。』

『ようし。低くなるよ。しつかりつかまつておいで。』

ズーとお馬が低くなると、鷄さんにニヤ〳〵さん、それからワン〳〵さん、草の上にお坐りすると圓く輪になつた。

『さあ、食べませう。』

『おや〳〵、おいしいな。』

『ほつぺたがとんでいきさうだ。』

皆おいしい柿をいたゞくと、お腹が一杯。

するとニコ〳〵ニコ〳〵見てゐらつしたお日様、

『さあ、今日はこれでお歸り。私もねんねに行きますよ。』

『お日様、有難う。面白かつたよ。』

『おいしかつたよ。有難う。』
『さあ、皆かへりませう。』
『お日様、左様なら。』
『左様なら。』

夕やけ、小やけ、
明日天氣にしておくれ。
ヒーン、ワン、ニヤン、コケツコツコー。
ヒーン、ワン、ニヤン、コケツコツコー。
お馬も、ニヤ〳〵も、ワン〳〵も、コケツコツコーの鷄さんも、皆仲よくお家に歸りました。おしまひ。

兎さんのお話

注意
主眼點　傷ついた小兎をいろ〳〵と介抱してやつたこ人の子供心を知らせたい。
時間　六分位。

今日は兎さんのお話をしませう。
こちらには高ーいお山。（右の方に山の形を手で作る。）こちらにも高ーいお山。（左の方に。）前にも高ーいお山。後にも高ーいお山。其のお山の中に、可愛らしい、丁度みなさん位の（此邊ニコ〳〵しながら）武夫さんといふ子供が住んでゐました。
武夫さんのお家のお隣りは、みいちやんのお家。
『みーちやん、遊びにいらつしやいよー。』

『あーい、今いきますよ。』

『武夫さーん、お饅頭をあげるからいらつしやいよー。』

『あーい、今とんで行くよ。』

二人は毎日仲良く遊んで居りました。

或日のこと、二人はお家のそばの原で、赤や白や黄な花をたくさんとつてをりました。すると向ふの草の中で、ごそ〳〵ごそ〳〵と音がします。

『みーちやん、何か音がするよ。』

『どこに。』

『そら、あそこの草（右の方を遠く指す）の中から。』

『あれ、こはいわ。武夫さん、お家へ歸りませう。』

『あれ〳〵、あれ、あそこの草が動いてゐるよ。』

『あら、……何か白いものが見えますよ。おゝ、こはい。あたいもう先に歸るわ。』

『なーに、こはくなんかないよ。僕何でもないよ。』

武夫さんは、元氣を出して草の動いてゐる方へ行きました。行つて見ると、そこには一匹の耳の長ーい、色の眞白な、お目々の赤い、可愛らしい小兎が苦しんでゐました。見ると胸の邊から赤い血が流れて、きれいな白い毛がよごれてゐます。武夫さんは、

『みーちやん、いらつしやいよ、兎さんですよ。兎さんですよ。』

『ほんたうですか。だましちやいやよ。』

みいちやんはびく〳〵しながら、武夫さんの方に近づいて行きました。可愛らしい小兎を一目見ると、みいちやんはにこ〳〵しながら、

『あら、可愛らしい兎さんね。どうしてにげないの。』

『よくごらん。可哀さうに負傷をしてゐるんだよ。』

みいちやんが屈んで良く見ると、兎さんはお目々を細くあいたまゝ苦しんでゐます。

『可哀さうにね。誰がいたづらをしたのでせう。武夫さん、何か布がないでせうか。』

『僕ね、お家へ行つてお藥を持てくるからね、みいちやんこゝにゐてくれよ。』

『いそいで行つて來てね。それから繃帶ももつて來てちやうだいね。』

武夫さんはお家へ飛んで行きました。みいちやんは軟らかい草をあつめて來て、その上に兎さんをねせました。

間もなく武夫さんが飛んで歸つて來ました。みいちやんが綿できれいに傷口をあらつてやると、武夫さんは繃帶をていねいにしてやりました。

厚く親切にして貰つた兎さんは、小さいお目々を嬉しさうに開いて、武夫さんとみいちやんとにお禮を言つて居る樣でした。二人は兎さんのうれしさうな顏を見て喜んでゐました。

それから間もないあるお月夜のことでした。みいちやんと武夫さんとはお縁側で、にこ〳〵のお月樣がお山の上にのぼつてゐるのを眺めてゐました。武夫さんが、

お月樣いくつ。十三と一つ。
まだ年は若いな。

とうたひますと、みいちやんは、

うーさぎ、うさぎ、
何見てはねる。
十五夜お月樣見てはねる。

とうたつてゐました。お月樣はだん〳〵とお山からはなれました。

『武夫ちやん、あのお月樣の中に兎さんがゐますよ。』

「見えるかい。」

『今晩はお兎さんが、みんなで面白くお餅をついてゐるのでせうね。』

『さう〳〵。あんなに明るいお國に餅つきは面白いだらうな。僕もついて見たいな。』

二人がこんな話をしてゐると、遠くの方からペッタン〳〵、ペッタン〳〵、（音が氣持よく表れる樣に工夫する）と聞えて來ました。さうしてその音が、だん〳〵近くなつたかと思ふと、お庭の木の蔭から、此の間の樣な可愛らしい小兎が、ぴょんぴょこ〳〵、ぴょんぴょこ〳〵をどりだしで來ました。みいちやんも武夫さんも、眼玉をこんなに（手で形をつくる）圓くしてびつくりしてゐると、兎さんはみな嬉しさうに、みんながもつて來たお荷物を、お庭の眞中に一杯つみました。

そしてたすけられた小兎が御禮を言ふと、みんなの兎さんも嬉しさうに、ぴょんぴょこ〳〵、ぴょん〳〵お辭儀をして、長い耳をそろへて歸つていきました。

武夫ちやんと花ちやんが、そのお荷物を開いて見ると、おいしいお菓子や鞄、赤いリボンやお人形、ほしい〳〵と思つてゐたものが何でもかでも一杯はいつてゐました。

これでおしまひ。

貰つた西瓜

注意
- 主眼點　貰つた西瓜がころがつて行つた話。
- 時間　十分。
- 其他　西瓜が轉び出す以後終りまで最もリズミカルに。

今日は西瓜のお話。

「カン〳〵カン〳〵。」

お鐘が鳴ると、幼稚園のお稽古がおしまひになつて、みんなカバンをかけて、

「先生、さよなら。」

「先生、さよなら。」

御挨拶をしてお家へ歸つていく。

次郎ちやんも、みんなと一緒にカバンをかけて、元氣よくお家へ歸つて行きますと、向ふの方から、お家へよく來る爺やが、何だか知らないが大きな青いものを抱へて來ます。

『やあ、坊ちやんですか。もう幼稚園はすんだのですか。』

『爺や。爺やの持つてるのは何だい。』

『これですか、隨分大きいでせう。これはね、西瓜ですよ。この西瓜がね、爺やの家の畑に出來たんですよ。』

『それ一つきり出來たの？』

『いゝえ〳〵、まだ〳〵たくさん出來てるんですよ。後で見にいらつしやい。西瓜の行列ですよ。』

『面白いなあ、西瓜の行列！　そんなにたくさんあるの？』

『ありますとも〳〵。』

『ぢやあ後で見に行くよ。僕ね、一寸カバンをお家において來るから。さようなら。』

次郎ちやん、大急ぎでお家へ歸りました。

『お母さん、只今。僕ね、西瓜の行列に行つて來ますよ。』

『何です。カバンなんぞ投げ出すものぢやありませんよ。西瓜の行列ですつて？』

『えゝ、爺やの所の畑に西瓜がたくさん出來たから見にいらつしやいつて。だから僕見に行つて來ます。行つて參ります。』

一生懸命でかけて爺やの西瓜畑へ來ました。

『爺やあ、西瓜を見に來たよう。』

『おゝ、坊ちやん、いらつしやい。どうです、たくさんあるでせう。ズーッと向ふまで青いのはみんな西瓜ですよ。』

『やあ、たくさんあるなあっ。いくつあるだらう。一つ、二つ、四つ、三つ、八つ。』

いゝかげんの數へ方をしてもどうしても數へきれない。

こつちの方にもゴロ〳〵、あつちの方にもゴロ〳〵、そつちの方にもゴロゴロ、ズーッと向ふまで、ゴロ〳〵〳〵、たくさんの西瓜が行列をしてゐます。

『おいしさうな西瓜だなあ。爺や、僕に一つ呉れない？』

『えゝ、あげますとも、坊ちやん所へも持つて行かうと思つてた所です。坊ちやん持てますか、重いんですよ。一番大きいのをあげませうね。どれがいゝだらう。これは小さいなあ。これは大分大きいぞ。いや、こいつが一番大きい。これをあげませう。』

持つてゐた鋏でつるをチョキン。

『さあ、坊ちやん、これを持つてらつしやい。持てますか。』

『持てるよ。僕は幼稚園で相撲を取つたつて一番強いんだよ。ドッコイショ。』

前にかゝへると、

『爺や、ありがたう。』

『ころばないやうに持つていらつしやい。』

大きな西瓜をかゝへてお家の方へ歸り出しました。

所が、前にこんな大きな西瓜をかゝへて居るでせう。だから、すぐ前の所がよく見えない。こんな目つきをしながら（兩手を前に出し、丸く輪をつくつて西瓜を抱へた樣子、そしてその手の先の邊をのぞき込む樣に見る）歩いてゐました。

すると、道に大きな石があつたのを、ついわからないものだから、その石につまづいて、バッタリころびました。

『アッ痛、ワーン。』

ころんだまゝ泣き出してしまつた。

丁度そこへ、次郎ちやんのお姉さんがいらつしやつた。

『次郎ちやん、次郎ちやん、どうしたの？　早くおきなきや駄目ぢやないの。これ、どうしたの。』

『あのね、僕今西瓜を。』（泣き聲にて。）

ひよいと頭をあげて見ると、どうでせう。先刻の西瓜がね、道の上をゴロンゴロン〳〵〳〵

『姉さん〳〵、僕の西瓜が轉んでいくから捉へてよ。』

二人は西瓜のあとから追つかけて行きました。

西瓜はゴロン〳〵ゴロン〳〵轉がつていくので、二人は一生懸命。

丁度そこへお家の兄さんがいらつしやつた。

『どうしたんだい。二人でかけつこしてるの？』

『うゝん。あのね、あのね、西瓜が逃げ出しちやつたの。兄さん、捉へて頂戴な。』

『よし〳〵。』

三人で追つかけていく

西瓜は相變らずゴロン〳〵ゴロン〳〵。

その中にお隣りのみいちやんが出て來て、

『どうしたの？』

『あのね、あのね、西瓜がね、逃げ出しちやつたの。一緒に捉へて頂戴な。』

今度は四人が一緒に追つかける。

西瓜はやつぱりゴロン〳〵ゴロン〳〵

みいちやんのお家のポチも、何が起つたのかしらと思つて後から、

『ワン〳〵ワン〳〵。』

とついてくる。

どん〳〵どん〳〵追つかけていくと、西瓜はやつぱりゴロン〳〵ゴロン〳〵轉んで行きましたが、その中に向ふにあつたお池の中へヂヤボン、おつこちてしまひました。

『やあ、お池の中へおつこちたぞ。』

來て見ると、お池の眞中にボカン〳〵浮いてゐる。

『困つたなあ。お池は深いから入られないし。困つたなあ。さうだ〳〵、みんなで大きな聲して呼び戻してやらう。』

『それがいゝ、それがいゝ。』

みんなでお聲をそろへて、

西瓜こい、此方へこい、

どんぶりこと、こつちへこい、

どんぶりことういてこい。

すると西瓜が、少しづつ〳〵、こちらへボツカリ、ボツカリ、ボツカリ、ボツカリとやつて來る。

『やあ、こつちへ來るぞ、もつと大きな聲で呼んでやらう。』

西瓜こい、こつちへこい、

どんぶりことこつちへこい、

どんぶりことういてこい。

西瓜はだん〳〵岸の方へ浮いて來る。

西瓜こい、こつちへこい。

『やあ、やあ、だん〳〵こつちへ來たぞ。』

どんぶりことこつちへこい。

『ア、、きた、きた。こんどこそにがすもんか。さあ、こい。どつこいしよ。』

やう〳〵西瓜を捉へることが出來ました。

『萬歳、々々。もうこれでいゝ。はやくうちへかへつて、みんなで喰べよう

よ』

みんな大喜びで、お家へ歸ると、お父さんも、お母さんも、兄さんも、姉さんも、お隣りのみいちやんも、ポチも、みんな一緒になつておいしい西瓜を頂きました。

象さんのお話

注意

- **主眼點**　なまけものゝ象が、蟻をいぢめた事によつて、自分の惡事を悔い、すつかり改心した所に重きをおきたい。
- **時間**　六分位。
- **其他**　態度は、たへず活動して子供の注意をそらさぬ樣に。象の態度は大きくゆつくりと、蟻の態度は小さくはしつこくやりたいものです。

○枕

蟻のお話をしませう。

○本話

鼻の長ーい、大きな象さんは大變ななまけもの。今日もドサリ〳〵と野原をあそんで歩るきました。圓るい太陽樣がお山にはいりかけると、大きな象さん

は、

『おや〳〵、もう日が暮れるのか。今夜の御飯はどうしよう。何か喰べるものがないかな。こまつたぞ。』

と獨言を言つてゐました。

草の上にどつかりと腰をおろして、なまけもの〻象は、何かうまい仕事はないかと、あたりを見てゐました。するとどこからか、

『ワッショ、〳〵〳〵ワッショ。』

と言ふ元氣の良い聲が聞える。

『やー、何か聞えるぞ。』

出來るだけの大きな眼をあいて、そこらを見廻すと、すぐ前の草の中を、黑い蟻さん達が大勢で荷物をはこんでゐる。

『何だ、蟻の奴か。おや〳〵、良い御馳走を運んで行くぜ。今晩の御飯の代りに貰ひたいものだなあ。』

象は大きな聲で、

『蟻さん、蟻さん、わしは今急にお腹が痛くなつてこの原に寢てゐる所だが、何かお藥はないかね。』

『象さん、それはお氣の毒ですね。お家へつれて行つて上げたいけれど、象さんの樣に大きくては、とてもどうする事も出來ません。困つたなあ。』

蟻は心配さうに考へてゐました。すると象は、

『實はね、蟻さん、わしは二三日何も喰べないのだ。それでおなかがペコーンペコーン。そのおいしさうな御馳走が貰へれば直ぐなほるだらうがな。』

『あげたいにはあげたいがね、一寸困りましたね。これをあなたにみんなやることは何でもないが、もしあげたらこの冬を私共の大勢はこすことが出來ないのです。』

『それぢやくれないといふのだね。そんなこと言はないでおくれよ。』
『あげたいけれど、どうぞこれ許りはお許し下さい。私共何千のものがその爲にみんな死んでしまつたらそれこそ大變です。他のことなら何でもお聞きします。』
『いやと言ふならそれでも良い。この象にも考がある。』
嘘を言つてだまかさうとした象は、長い鼻をのばしてその蟻の荷物をとつてしまひました。たくさんの蟻は小さい手をあはせてをがみました。けれどもなまけものの象は、そんな事は少しも聞きませんでした。象は御馳走をたべながら言ひました。
『あゝ、うまい／／。これでやつと助かつた。蟻なんて馬鹿のものはない。いくら働いてもわしにかゝればこの通りだ。どれ、これから毎日こゝで嘘を言つては蟻をいぢめてやらう。』

此の事を聞いた蟻の大將、
『あの象はお腹が痛いなんて、嘘を言つてゐたのだな。よし／／、今に見てゐろ。どんなに體が大きくてもひどい目にあはせてやるぞ。』
蟻の大將さんぶん／／おこつて、すぐ家來の蟻を集めました。家來の蟻がどんどん寄つて來る。
『いかにもくやしいわい。』
『どうかして敵をとつてやらう。』
そこで大將の蟻は、
『それでは國中の蟻をみんな集めて來い。』
と言ひつけました。しばらくたつと、來た／／。どこから來たのか何萬、何十萬の蟻が一杯集つて來ました。大勢でいろ／／相談しました。さうしてとうとうきめました。夜の暗い時、象の眠つてゐる所をせめようときめました。何萬

といふ蟻が、手に手に槍をもつて勇ましく進む。ラッパ手が、

『トテチテタ、トテチッチチ、タテター。』

すると大勢の蟻が、足をシュッ〳〵〳〵と揃へて、象の眠つてゐる所に向ひました。

象は鼾をかいて眠つてゐます。蟻の軍隊が體にのぼつてもまだ知りません。槍をもつた蟻が、大きな象の體中に、一面に澤山の穴をあけて、その口からどん〳〵毒をつぎこみました。つぎ込んでしまふと皆の蟻は高い丘の上にきて、一、二、三と大聲で叫びました。あんまり大きな聲だつたので寢てゐた象が、

『うーん。あーあー。』（欠伸の眞似をする。）

眼をさました。眼をあけるとちつとも見えない。

『やー、をかしいぞ。何にも見えないぞ。夢かな。』

『や、たしかに夢ぢやない。あつ、あいたたゝ。腰が痛いぞ。頭が痛いぞ。あつ、足が痛い。手が痛い。鼻も痛いぞ。耳も痛いぞ。た、た、誰か助けてくれえ。』

いくらさわいでも夜のことでまつくらです。誰も來てくれません。大きな象さんは一晩中苦しみました。そして嘘を言つていけなかつたなあと思ひました。

『あゝ、わるいことをした。きつとあの蟻のしかへしに違ひない。あゝ、自分がわるかつた。』

象はすつかり心をいれかへました。

○結

それから蟻は少しもいぢめられませんでした。おしまひ。

狐の寫眞屋

注意
- 主題點　狐が鏡をひろつて寫眞屋を始めて失敗した話。
- 時間　八分。
- 其他　山羊のお化けを見る所を最高調に。

あるお山の中に一匹の狐が住んで居ました。その狐のコン吉さんが、ある日野原を散歩してゐると、向ふの方に何だかピカ〳〵したものがあるので、何だらうかと思つて近よつて見ました。

『何だらうなあ。ピカ〳〵光つてるぞ。硝子かしら。おや、僕の顔が寫つてるぞ。何だらう。あゝ、さうだ、鏡に違ひない。これはいゝものをひろつたぞ。何か面白いことを考へてやらう。』

その鏡を持つてお家へ歸りました。

『あゝ、いゝことがある。兎も、狸も、山羊も、みんな鏡なんか知らないんだから、だましてやらう。なんと言つてだましてやらうかな。さうだ、寫眞屋を始めてやらう。』

それから木を集めて來て、小さな四角い箱を作りました。そしてその箱の底へ鏡を入れて、上の蓋をパカンと開く樣にしておきました。

それからその箱に紐をつけて、背中に背負つてお家を出かけました。

『何處へ行つてやらうかしら。先づ兎の所へ行つてだましてやらう。』

兎のピョン助さんの所へやつて來ました。ピョン助さんは日向ぼつこをして居りましたが、

『あ、いたづら者のコン吉が來たぞ。何しに來たんだらう。』

思つて居る所へコン吉さんが、

『やあ、ピョン助さん、日向ぼつこですか。あつたかさうですね。』

『やあ、コン吉さんか。今日は何しにいらつしやいました。何です、その背中のものは。』

『これですか、これはね、寫眞機ですよ。私は今日から寫眞屋をはじめましたから、よろしくお願ひいたします。』

『おや〳〵、さうですか。寫眞屋さんになつたのですか。ほんとに寫りますか。』

『寫りますとも。ためしに一つ寫してあげませうか。さあ、そこへお坐りなさい。』

寫眞を寫して貰へるといふので、ピョン助さんは大喜び。着物をなほしたり、帽子をかぶつたり。

狐のコン吉さんは、

『どつこいしよ。（背中の寫眞機をおろす身振り。）仲々いゝ寫眞機でせう。さあ寫し

ますよ。よござんすか。ちやんとこの箱を見てゝ下さい。はい。』

といふと、箱の蓋をバカンとあけて、バタンと閉めました。

『さあ、もう寫りました。御苦勞さんでした。』

『コン吉さん、ほんとに寫つたんですか。』

『えゝ、寫りましたとも。』

『ちやあ見せて下さい。』

『よし〳〵、ごらんなさい。』

さういつて、箱の蓋を開けて、ビョン助さんに見せました。

『おや〳〵、ほんとに私の通りに寫つてゐる。コン吉さん、あなたは上手ですね。』

『えゝ、私は寫眞をうつすことは上手ですよ。』

又寫眞機を背中に背負つて、大威張りで兎のビョン助さんの所を出て行きました。

『ビョン助は馬鹿だなあ。うまくだましてやつた。あゝ、面白かつた。こんどは誰をだましてやらうか知ら。』

野原をブラ〳〵歩いてゐました。

兎のビョン助さんは、狐のコン吉にすつかりだまされて、

『コン吉はいつもいたづらばかりしてるが、寫眞を寫すことはうまいものだ。ほんとによく寫つて居た。お隣りの山羊さんにもこの話をしてやらう。』

『もし〳〵、山羊さん、ゐらつしやいますか。』

『オヤ、ビョン助さんですか。何か御用ですか。』

『今ね、狐のコン吉が來ましてね、寫眞を寫して呉れたんですよ。それは〳〵上手なんです。あなたも一つ寫して貰つてごらんなさい。』

『さうですか、では僕も寫して貰つて來やう。あつ、あそこを行くのはコン吉

さんですね。急いで行つて來やう。』

どん〳〵かけ出しながら、

『コン吉さあん、コン吉さあん、一寸待つて〻くれ。』（兩手を振つて走る身振りをしつゝ）

『やあ、山羊さんですか。何か御用ですか。』

『今ね、ビョン助さんから聞くと、コン吉さんは大變寫眞を寫すことが上手ださうですね。だから僕も一つ寫して貰ひたいと思つて追つかけて來たのです。寫してくれますか。』

『えゝ、寫してあげますとも。こんな原つぱではつまらないから、向ふの木のある好い所で寫しませう。さあ、私の後についていらつしやい。』

山羊さんはコン吉さんの後からつついて行きました。するとその中にコン吉さんの背負つて居た寫眞機の箱の蓋が、バカンと開きました。山羊さんはヒョイと見ると、その箱の中にも自分と同じ山羊が居る。こちらが頭を動かすと、向ふも頭を動かす。口を開けると、口を開ける。

『オヤ、これはこの中にお化けが居るのかも知れないぞ。よし、あのお化けを突つころしてやらう。』

それからよくねらつておいて、角でもつてグイと突きさして、ビョーイと上へはふり上げました。

コン吉さんは、アッといつて居る中に、上の方へビョーイとはふり上げられて、またそのまゝドサンとおつこちました。

『アッ、痛い。ホウ、痛い。山羊さん、あなたは何をするんです？』

『今ね、あなたの背中にお化けが居たから僕が角でつついてやつたんですよ。』

『えつ、僕の背中にお化けがゐるつて？　ほんと。』

『その箱の中に居ましたよ。』

『箱の中に？』

急いで箱を取つて中を見ると、鏡はすつかりこはれてしまつて、もうお化けは居ませんでした。

狐のコン吉は、お腰をおさへて、

『痛い、痛い。』

といひながらお家へ歸りました。

お人形餅

注意

- **主眼點**　小人がお人形をくれる。そのお人形が餅をついてくれる話。
- **時間**　十分。
- **其他**　小人が出る形式は、雪の無い時ならば、他の形式がいゝでせう　道に水を撒いたとか、道にあつた邪魔なものを取除けたとか。
  結は他の惡人がそのお人形を取つて失敗したとはしたくありません。三四年位の高學年に話すとすれば、時にはさうしてもいゝでせうが。

あつちの方（右前を指す）の山が眞白になりました。こつちの方（左前を指す）の山も眞白になりました。あつちの方の山から風がビユーッと吹いて來ると、木の葉がバラ〳〵〳〵と落ちる。おゝ、寒い〳〵。（手を縮め上體をかゞめて寒さうな態度）こつちの方の山から風がビユーッと吹いて來ると、木の葉がバラ〳〵〳〵

と落ちる。おゝ、寒い〳〵。（態度同上。）

夜になると、あつちの山からも、こつちの山からも、寒い風がビュー〳〵吹いて來てね、おせいちやんの家の戸をゴト〳〵〳〵、ゴト〳〵〳〵とゆする。戸の隙間から冷い風がビューッと吹込んで來る。おゝ、寒い〳〵。

おせいちやん、あんまり寒かつたので、赤いお布團の中へスポッと入つてしまつてねんねしました。

翌朝ふと目をさまして見るとね、外は一面に眞白。木も眞白。草も眞白。お庭も眞白。お家の屋根も眞白。降つた〳〵。こんなに（右手を右の肩まで上げて積雪の多さを示す）たくさん降りました。

御飯を頂いてから暫くするとね、前の道を學校へ行く子達がだん〳〵通る。お隣の太郎さんが、高い齒の下駄をはいて、ヒヨロ〳〵〳〵、ヒヨロ〳〵〳〵とやつて來たが、雪が下駄の齒の間に一ぱいになつてバタリと倒れた。それを見たおせいちやん、すぐお父さんの所へ飛んで行つてね、

「お父さん〳〵、太郎さんが倒れたの。可哀さうにねえ。さあ、雪除けしませう、雪除けしませう。」

お父さんを引つぱり出して前の道へ出る。お父さんが雪掻きで、シュッ〳〵と雪をおのけになると、せいちやんも、こんな大きな雪掻きを持つて、ヒヨロヒヨロ〳〵、ヒヨロ〳〵〳〵とやりながら雪をのける。學校へ行く子達が、

「おせいちやん、有難う。」

「おせいちやん、有難う。」

暫くのけてゐると、大てい道があきましたから、お父さんはお家へお歸りになる。後でおせいちやん一人だけ、まだ大きな雪掻きでシュッ〳〵とやつてゐる。シュッ〳〵、シュッ〳〵。（態度。）

道のこちらの方をシュッとやるとね、カチリ！

『おや？』

も一度シュッとやると、又カチリ！

『おや〳〵？』

も一度シュッとやつたらね、そこの石が一つ、ポコリと起きた。その下からポイ。おや〳〵、變なものが飛出したぞ。眞白な着物を着て、眞赤な帽子をかむつて、變なものが飛出したぞ。おや、まあ、小さいねえ。これつばかり（右手の指で一寸位の長さを示す、此の邊常に左下を見下しつゝ）しかないよ。小さいねえ。

その眞白な着物を着た、眞赤な帽子をかむつた、これつばかりの小さな男がね、おせいちやんの持つてゐた大きな雪搔きの柄を、ツル〳〵〳〵と登つて來て、おせいちやんの手の上へポイと飛上つた。飛上るとムニヤ〳〵〳〵、ムニヤムニヤ〳〵、何か言つてゐる樣だ。

『何かお話しするの？　え、何？』（小人を右手に乘せたまゝ耳の所へ持つて行く。）

『雪除けの御褒美にいゝものを上げますつて？　いゝ物？　何くれるんでせう。』

（右手を耳の所に置いたまゝ。）

『え？　今出しますつて？　何だらうねえ。』（同上。）

何をくれるんだらうと、その小人を下してみるとね、眞赤な帽子をチョイとぬいで、その中へ手を入れましたが、おや〳〵、何か出るんかなあ。やあ、出したぞ。妙なものを出したぞ。

見ると小さな臼を一つ。

『も一つあげませう。』

又帽子の中へ手を入れた。やあ、出したぞ、出したぞ、又妙なものを出したぞ。

見ると小さな杵が二本。

『も一つあげませう。』

又くれるつて、今度は何をくれるんでせう。あれ〳〵、又帽子の中へ手を入れたぞ。やあ〳〵、出したぞ、出したぞ、又妙なものを出したぞ。

見ると小さな人形を二つ。

『え！　何？　又お話があるつて？』（耳へ持つて行く。）

『うん〳〵、あゝさうか。この臼と、杵と、お人形とを机の上に列べて、……え？　フッ、フッ、フッと三遍吹いてやると、このお人形がお餅をついてくれるつて。あゝさうか。有難う〳〵……え、まだ大事な事があるつて？　うんうん、さうか。おしまひには有難うと言つて、又フッ、フッ、フッと三遍吹くんだね。あゝさうか。有難う〳〵。』（右手を耳の所に置いたまゝ獨語。終りて下げて右手の上を見る。）

おや〳〵、居ないぞ、どこへ行つたんでせう。落したのかしら。（下を捜す。）居ない、居ない。どうしたんだらう。どこへ行つたんだらう。でもまあいゝ、こんな御褒美を貰つたんだから。

御褒美の臼と、杵と、お人形とを大事に持つてお家へ歸ると、さあお餅をつかせませう。

机の眞中に臼を置いて、臼のこちらに杵を一本、こちらに杵を一本、こちらの杵の側にお人形を一つ、こちらの杵の側にもお人形を一つ。さあ吹くんだ。

『フッ、フッ、フーッ。』

すると今迄寝かしてあつたお人形が、俄にムク〳〵〳〵と起上ると、側にあつた杵を取つて、臼の所へかけ寄つた。何にも入つてゐない臼の中を、コッンコッン搗いてゐると、おや〳〵〳〵、臼の中がだん〳〵白くなりましたよ。音がだん〳〵變つてきましたよ。コッン〳〵といふのが、いつの間にやらペタンペタンペタン〳〵。とう〳〵お餅が出來ました。

搗いてしまふと、二人のお人形はおせいちやんの方をむいて、ピョコリ〳〵

とおじぎをしてね、

『どうぞお上り下さい。』

『どうぞお上り下さい。』

おせいちやんが、小さな臼の中からお餅をチョイと取つて、手の上へ載せる（右手でつまみ、左手の上へのせる）とね、これつばかし（右手の指で小さな輪を作る）のお餅がブク〳〵。大きなお饅頭位になつた。

『おいしさうですねえ。御馳走さま。』（食べる。）

食べてみるとね、まあおいしい〳〵。こんなにおいしいものは生れてから始めてです。

食べてしまつてチョイと机の上を見るとね、おや〳〵、又お人形がペッタンペッタン搗いてゐる

搗けてしまふと二人のお人形が、ピョコリ〳〵おじぎをして、

『どうぞお上り下さい。』

『さあ、お上り下さい。』

おいしいねえ。（取上げて食べる態度。）頬が飛んで行きさうだ。あゝおいしい。

おや、又ついてゐるよ。ペタンコ〳〵、もう搗けました。ピョコリ〳〵おじぎをして、

『どうぞお上り下さい。』

『さあ、お上り下さい。』

おいしいねえ。（取上げて食べる。）あゝおいしい。

おや、又搗いてゐるよ。ペタン〳〵、もう搗けました。ピョコリ〳〵おじぎをして、

『どうぞお上り下さい。』

『さあ、お上り下さい。』

おいしいねえ。（食べる。）おや〳〵〳〵、又搗きだしたよ。もうお腹一ぱいで食べられないのだが、あゝさう〳〵、お父さんにも、お母さんにも、兄さんにも、姉さんにも上げませう。

お父さんに十、お母さんに八つ、兄さんに六つ、姉さんに四つあげました。

それだけあげるとお人形にね、

『有難う、有難う。』

といつて、

『フッ、フッ、フーッ。』

吹くと、今迄元氣よくお餅をついてゐたお人形は、バタリ、バタリとそこへねんねしてしまひました。

おせいちやんは、それから後も、何遍も何遍もお人形にお餅をついて貰ひました。これでおしまひ。

鶯のお宿

注意
- 主題點　逃げた鶯をたづねてそのお宿へ行つた話。
- 時間　九分。
- 其他　宿をたづねる途中は加減適宜。

武子ちやんのお家には、一羽の鶯が飼つてありました。

春になつて梅の花が咲き出すと、いゝ聲をして、

『ホーホケキヨ、ホーホケキヨ、ケキヨ、ケキヨ、ホーホケキヨ。』

武子ちやんはその鶯が大好き。毎日可愛がつてゐましたが、或日のこと、朝お目々をさまして鶯を見に行かうと思つてゐると、婆やが、

『武子さん、ゐらつしやいますか。御免なさい。お許し下さい。』

『どうしたの？』

『あの、鶯がね、鶯がね、逃げちやつたんです。』

『どうして？』

『鶯の籠があんまりきたないから、お掃除してやらうとしたら、ツーイと逃げてしまひました。御免なさいまし。』

『いゝわよ〳〵。』

さあ、それから武子ちやんは、お家の近所をあちらこちらとさがしましたけれども、どうしても見つかちない。

『鶯のお宿へ歸つてしまつたのかも知れない。明日尋ねて行つて見ませう。』

次の日に、

『お母ちやん、お願ひですからお握りをたくさん作つて頂戴な。』

『おや、お握りですつて？　お遠足でもあるのですか。』

『いゝえ、あの鶯のお宿をさがしに行くんですから。』

お握りを作つていたゞいて、それをお背にどつこいしよと背負つて、お家を出かけました。そしてエッチラコ、エッチラコ、お山の方へ參りました。

『鶯のお宿はどこなのか知ら、誰れか居たら聞いて見ませう。……おや、あそこにメエ〳〵の山羊さんが居るわ。山羊さんに聞いて見ませう。……もし〳〵、山羊さん、山羊さん。』

『メエ〳〵、何御用ですか。』

『あのね、鶯さんのお宿は何處でせう。知つてたら教へて下さいな。』

『あゝ、鶯さんのお宿ですか。このお山をヒョイと越えると、そこに狸さんのお家がありますから、そこへ行つて聞いて御覽なさい。すぐわかりますよ。』

『このお山をヒョイと越えるんですか。どうもありがたう。』

エッチラコ、エッチラコとお山を越えると、そこに狸さんのお家があつて、お腹をポーン、ポーンと叩いてゐます。

『もし〳〵、狸さん、狸さん。』
『ポーン、ポーン、何御用ですか。』
『あのね、鶯さんのお宿は何處でせう。知つてたら敎へて下さいな。』
『あゝ、鶯さんのお宿ですか。このお山をヒヨイと越えると、そこに狐さんのお家がありますから、そこへ行つて聞いて御覽なさい。すぐわかりますから。』
『この山をひよいと越えるんですか。どうもありがたう。』
エッチラコ、エッチラコとお山を越えると、そこにコン〳〵の狐さんのお家がある。
『もし〳〵、狐さん、狐さん。』
『コーン、コン、何御用ですか。』
『あのね、鶯さんのお宿は何處でせう。知つてたら敎へて下さいな。』
『あゝ、鶯さんのお宿ですか。あのお山をヒヨイと越えると、そこに雉子さんのお家がありますから、そこへ行つて聞いて御覽なさい。すぐわかりますから。』
『この山をヒヨイと越えるんですか。どうもありがたう。』
エッチラコ、エッチラコとお山を越えると、そこにケン〳〵の雉子さんのお家がある。
『もし〳〵、雉子さん、雉子さん。』
『ケーン、ケン、何御用ですか。』
『あのね、鶯さんのお宿はどこでせう。知つてたら敎へて下さいな。』
『あゝ、鶯さんのお宿ですか。ズーッと向ふに綺麗な林が見えるでせう。あそこが鶯さんのお家ですよ。』
『あら、あの梅のたくさん咲いてゐる所なの。どうもありがたう。』
武子ちやんは大喜びで、鶯さんのお宿へやつて來ました。たくさんの梅の花

がきれいに咲いて、花の中の方から、

『ホーホケキヨ、ホーホケキヨ、ケキヨ、ケキヨ、ホーホケキヨ。』

美しい聲が聞えて來ます。

『まあよかつた。やつと來ることが出來た。鶯さん居るか知ら。御免下さい。御免下さい。』

すると梅の花のお家の奥の方から、鶯さんが出て來ました。

『あら、武子さん、よくいらして下さいました。さあ、お上りなさい。』

『鶯さん、あなたどうして逃げて來ちやつたの？』

『私ね、お父さんやお母さんや、兄さんや姉さんに逢ひたくなつて歸つて來ました。』

『あゝ、さう。お父さんやお母さんがらつしやるの？』

『えゝ、居ますの。お父さん、お母さん、あのね、武子さんが尋ねて來て下さいましたよ。』

すると お家の中からみんな出て來て、

『まあ、よく來て下さいました。さあ、お上り下さい。』

鶯さん達は、家中で武子さんのおもてなしをしました。

たくさんのおいしい御馳走を頂いたり、美しい唱歌を聞かせて貰つたりして面白く遊びました。

武子さんが歸る時には、

『なんにもお土産が御座いませんから、このお琴をさしあげませう。これをお土産に持つてかへつて下さい。』

『どうもありがたう。ではさよなら。』

鶯さんとお別れしてお家へ歸りました。

『お母さん、鶯さんのお宿では、いろ〳〵御馳走して貰つたり、唱歌を聞かせ

て貰つたり、それは面白かつたのよ。そしてね、お土産にこのお琴を貰つて來たの。ひいて見ませうか。』

武子ちやんが、お座敷の眞中でそのお琴をポロンとひきますと、

『ホーホケキヨ、ホーホケキヨ、ケキヨ、ケキヨ、ホーホケキヨ。』

それは〳〵美しい音が出ました。

武子ちやんは、鶯の歌が聞きたくなるといつでもそのお琴をひきました。

『ホーホケキヨ、ホーホケキヨ、ケキヨ、ケキヨ、ホーホケキヨ。』

おしまひ。

雪だるま

注意

主眼點　雪をよろこぶ子供の心持を中心として、この話をつくりました。

時間　五分乃至八分。

其他　結びは夢にしないで、面白くだるまのお家で遊んでかへる樣にしても面白いと思ひます。

恒ちやん、幼稚園から、

もういくつねるとお正月、

お正月には凧上げて、……

歌ひながら歸つてくると、寒い風がビユー。

『おゝ寒い。』

こまをまはして遊びませう、

早く來い〳〵お正月。

ピユー。

『おゝさむい。』

向の方には、高い〳〵山が見えました。

『おや、お山に雪が降つた。早く此處にも降ればいゝな。雪がふると、雪だるまをつくつて、雪合戰をして、それからスーとすべつて。（指を折つて數へる）面白いな。』

早く雪降る樣に、（拍手しながら歌ふ。）
早く雪降る樣に。

お家の戸をガラリあけると、

『お母さん、雪いつ降る？』

『まあ、何ですか、この子は。いつて參りましたもいはないで。』

『じやね、いつて參りました。雪はいつ降る？』

『恒ちやんがね、いゝ子してると降りますよ。』

恒ちやん、その晩はいゝ子してねんねした。

あくる朝、フット目を覺ましてみると、表で、

『澤山お雪が降つたな。』

『よくすべるよ。』

『おや、大きなだるまを作つたね。』

之をきいた恒ちやん、いつもならお母さんが、

『恒ちやん、お起きよ、ね、恒ちやん。』

『ウ、ウ、ウー。僕ねむいんだもの。ウ、ウ、ウー。』

とやるんだが、今日は獨でとび起きた。お庭に出てみると、降りましたよ、降りましたよ。おまけにまだどん〳〵降つてゐる。

『うれしいな。うれしいな。』

雪やこん〳〵、霰やこん〳〵、
降つても降つてもまた降る程に、
雪やこん〳〵、霰やこん〳〵。

表へ出てみると、澤山のお友達が、もうスー〳〵とすべつたり、雪だるまをつくつてゐる。もうあつちにもこつちにも、大きなだるまや小さなだるまができてゐる。

恒ちやん、小さいお雪の玉をつくると、お雪の中をコロ〳〵コロ〳〵轉がし出した。コロ〳〵〳〵〳〵轉がる度に、小さい玉がだん〳〵大きくなつて行く。

『やあ、今度は片手ぢやだめだぞ、兩手だ。』

ヨイショ、とおすとコロリ。重いぞ。ほらもう一つ。ヨイショ、コロリ。ヨイショ、ヨイショ。さあ、今度はだるまさんの首だ。

もう一つ小さいお雪の玉を、コロ〳〵〳〵、コロ〳〵〳〵。

『さあ、兩手だぞ。』

ヨイショ、コロリ、ヨイショ〳〵。

『さあ、之で首が出來た。』

どつこいしよ。（首を胴にのせる身振。）お家からたどんをもつてくると。チョッ、チョッ、チョッ。（目をつける身振）　二つのお目とお口ができた。

『だるまさん、今日は。一緒に遊びませう。……おや、もう幼稚園へ行く時間だ。一人でおとなしく遊んでお居で。ね、又遊びませう。』

幼稚園から歸つてくると、一日仲よく遊んで又いゝ子してねんねしました。

ねんねしてゐると、

『恒ちやん、恒ちやん。』

フット目をあけてみると、だるまさんが坐つてゐる。

『おや〳〵、だるまさん、どうしたの。』

『恒ちやん、これから面白いところへ遊に行きませう。お迎に來ましたよ。さあ、行きませう。』

だるまさんコロ〳〵、コロ〳〵、お先に轉つていく。あとから恒ちやんついて行く。だるまさん、玄關を出て、表へ出て、コロ〳〵〳〵轉つて行く中に、一つの坂へやつて來た。ところがだるまさん、急に轉がらなくなつてしまつた。側へいつてみると、フー〳〵、フー〳〵、苦しさうな息氣をしてゐる。

『だるまさん、どうしたの。』

『あー、苦しい、あとから押して頂戴。』

『おやすい事だ。いゝかい。』

ヨイショ、ヨイショとおすと、コロリ、コロリ動き出した。

『ほら、もう少しだ。』

ヨイショ、ヨイショ。坂の上まで上るとだるまさん急に元氣になつて、コロコロコロ〳〵走り出した。後から恒ちやん一生懸命駈けていく。だるまさん一層元氣になつて早いこと、早いこと。コロ〳〵コロ〳〵、コロ〳〵コロ〳〵。恒ちやん後から、（一生懸命駈ける身振。）

『おーい、だるまさん、待つて頂戴。（苦しさうに）おーい、待つて頂戴。』

だるまさん、そんなことはおかまひなし。コロ〳〵、コロ〳〵、コロ〳〵、コロ〳〵、後から恒ちやん、（一生懸命かける身振）ところが元氣よく走つてゐただるまさん、また動かなくなつた。みると大きな銀の御門がある。

『恒ちやん、こゝですよ。さ、入りませう。』

中へ入つてみると、どのお部屋も、どのお部屋もやつぱり銀。ピカ〳〵光つてきれいなこと。廣いお部屋でまつてると、あつちのお部屋からコロリ、こつ

ちのお部屋からもコロリ、大きなだるまに、小さいだるま、赤いだるまに、青いだるまや、白いだるまがコロ〳〵、コロ〳〵、入つてきた。

『さあ、恒ちやんにだるま踊をして見せて上げよう。』

大きいだるまも、小さいだるまも、赤いだるまも、青いだるまも、白いだるまも、皆鉢巻をすると、

ころり、ころり、ころがつて、

ころり、ころりと起き上る。

お手やお足のない體。

ころり、ころりのだるまさん。（首を左右に振つて踊を表す。）

コロリ、コロリ踊りだした。恒ちやん面白くなつて、コロリ、コロリ。（首を振る。）見てゐると、廣いお部屋もコロリ、コロリ踊りだした。澤山のだるまさんに、廣いお部屋がコロリ、コロリ踊るのを、コロリ、コロリ見てゐた恒ちやん、とうとうお目がコロリ、コロリまひだすと、何にも見えなくなつて倒れさうになつたから、

『おかあさん。』

『おゝ、恒ちやん、どうしたの。』

よくみると、恒ちやんはやつぱり、かあいゝ蒲團にねんねしてゐました。

おしまひ。

がまさんとお猿

注意

主眼點 お猿の先走つた惡智惠が却つて身を亡ぼし、ゆつくり温和な態度をとつた蝦蟇が幸運を得た點に輕い教訓を持たせたい。

時間 八分乃至十分。

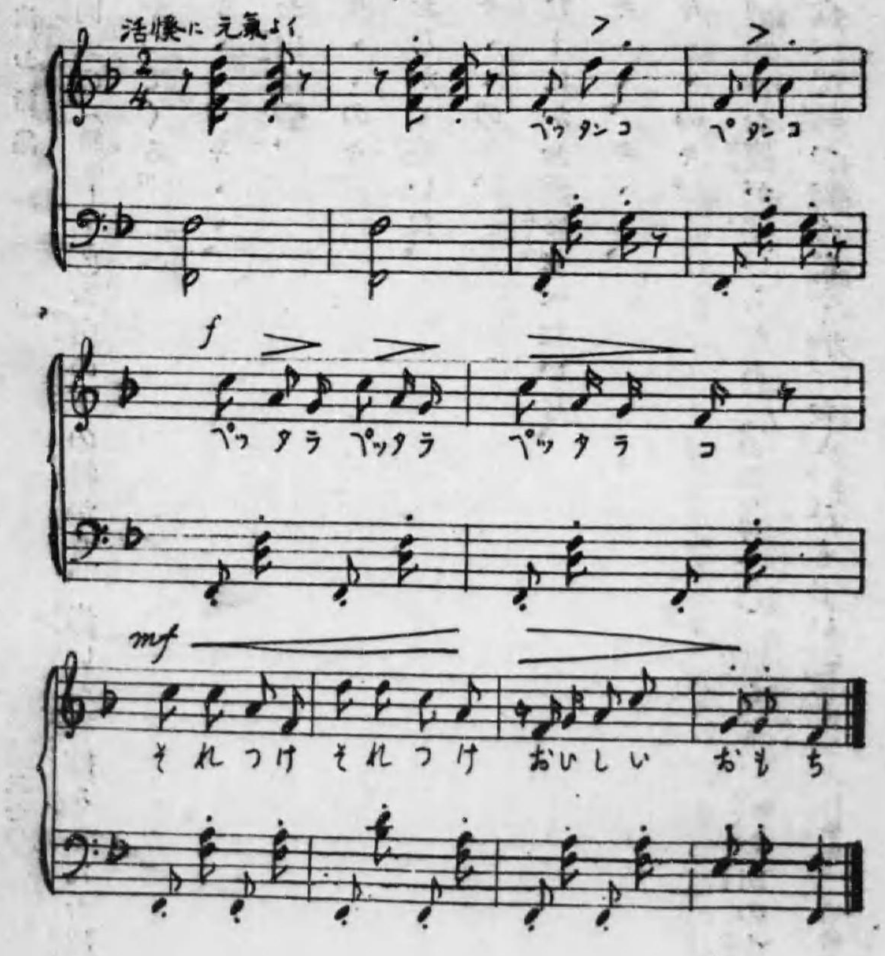
其他 美しく音樂を入れて見たい。細かい曲は入れないが、本話の始めのがまの唄の前後にも、春の暖いお日の照る曲を入れたい。臼が山を墜落する所にも相當な曲を入れたらよからう。第五卷の「お餅取り」と似たものです。但し、筋が幾分違ひます。音樂の入ることは大きな特異點です。

○枕

皆さん、お餅は嫌ひ？（少し間を入れ見渡す。）あゝ、みんなお好きの樣ですね。それでは今ノツソリ〳〵はふがまさんとお猿さんが、お餅のとりつこの競爭をした面白いお話をして上げませう。だれが食べたか、ようく聞いて頂戴。

かまさんとお孫中の

お餅つきの歌



○本話

グ、、、グ、、、
お池は靜、
グ、、のグ、
誰ーれも居ない、
グ、、のグ、
チョイとお畳寢しませうか、
グ、、、グ、、、
グ、、のグ。

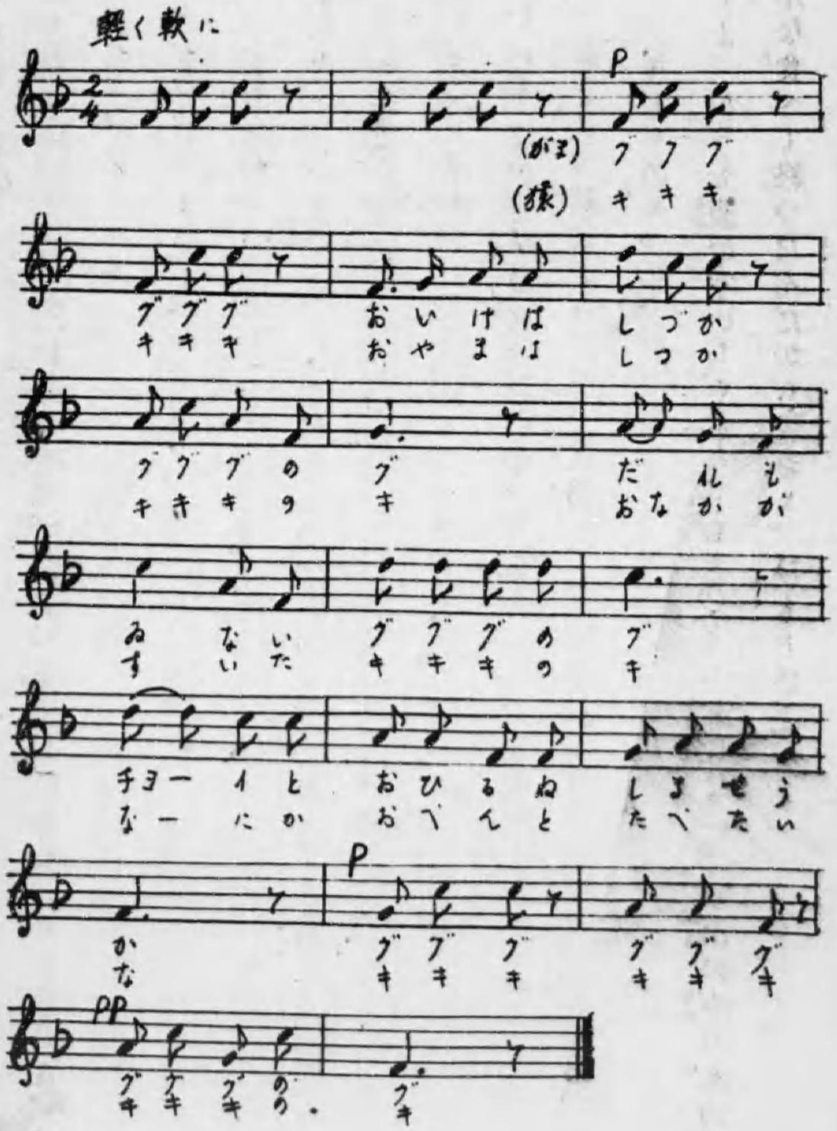
春の日がポカ〳〵照りますので、（適當に時季に依り變更）がまさんのお眼々は、だん〳〵細くなつて來ました。兩方のお手々をキチンと（兩手をつく）ついたまま、トロリ〳〵とお夢の國の方へ行きます。（子守唄の曲を入れ微壓で唱歌するも可。）

すると向ふの（指さしする）お山の下の村から、赤いお袢纏をきたお猿さん、何か歌つてやつてくる。

キ、、、キ、、、
お山は靜、
キ、、、のキ、
おなかゞ空いた、
キ、、のキ、
なーにかお辨當食べたいな、
キ、、、キ、、、
キ、、のキ。

『待てよ、かうお腹が空いちやあ（お腹を押へて）堪らない。お山の中の木の實はみんな食べて終つたんだから、おゝ、ひもじい。』

がまさんとお猿の歌



（かげで歌ふか又は演者が拳と握りこぶしとで餅搗の擬聲。）

ペッタンコン〳〵、

ペッタラ〳〵、ペッタラコ、

それつけ〳〵、おいしいおもち。

『あー、どこかでお餅をついてるぞ。（手を耳に聞く樣子。）あゝ〳〵聞える。（段々眼を移して場所を決める。）一つでいゝが喰べたいなあ。（ジーッと考へて）ウン、いゝ事がある。がまさんと相談しやう。』（急いで行く樣子をして後何か捜す。見附ける。）

『おーい、がまさん〳〵。』（片手を上げて呼ぶ樣子。）

面白い夢を見て居たがまさん、吃驚して、大きなお目々を開けて見ると、いつものお猿さんが居るので、

『なあに、お猿さん。今日も惡戯しに行くのならいや。お留守居なんだから。』

『あのねがまさん、今日は惡戯ぢやないよ。あのね、あの音をお聞き。聞える

でせう。』（聞く樣子、かげで又歌ふ。）

ペッタンコン〳〵、

ペッタラ〳〵、ペッタラコ、

それつけ〳〵、おいしいお餅。

『あッ、お餅をついてゐるね。おいしい匂ひがして來るぞ。』（がまの匂を嗅ぐ樣子。）

『お餅の匂ひがするだらう。食べたいだらう。』

『一つでいゝから食べたいね。』

『それならがまさんかうしませう。（耳へ口をよせるまね、以下少し小聲で。）私がね、あの火の見へ上つて半鐘をジャン〳〵叩くから、がまさんは裏のお勝手で待つてゐて、家中が表へとび出したら、そのすきをねらつてお臼を擔いであの小山まで（自分の後を指す）きておくれ。私は其處に待つてゐるから。』

相談の出來た二人は、すぐに出かけました。がまさんが裏口でのぞいてゐる

とは知らず、村長さんのお家では、みんな本氣でお餅つきです。（手でつくまね。）

ペッタンコン〳〵

すると（手で鐘を叩くまね）俄にジャン〳〵〳〵。

『そら、大變だ〳〵。』（うろたへさわぐ樣子。）

『火事はどこだ〳〵』（走り出す樣子。）

みんな表へかけ出した後、がまさんはゆつくりお餅の入つた臼を背中へ擔いで、（兩手で擔ぐ樣子。）

ヨイサ、バツタラ、（かついではふ樣子。）

ホイサ、バツタラ。（山へ上り行く樣子。）

お猿さんはとうにきて待つてゐました。

『やあ、がまさん御苦勞樣。あつ、あつ、ホカ〳〵あんなに煙が立つてゐるね。おいしいだらうね。』

『お猿さん、あゝくたびれた。いつもお猿さんはうまい考へをする。感心しちやつた。さあ食べやう。』

がまさんは汗をふきながら、（汗をふくまね）お猿さんの顏をヒヨイとのぞくと、お猿さんはチーッと何か考へこんでゐる。

『ネーお猿さん、早く、食べやう、どうしたの。』

といふとお猿さんは漸う、（頭を上げて。）

『がまさん、私は一つ好い事を考へついた。こゝからこのお臼をゴロ〳〵ッと轉し落して、あとを一二三で駈つこして、先きへ行つてお餅をとつた者がみんな食べる事にしやう。』

駈足の速いお猿さんは、折角がまさんがかついできたお餅を、自分ばかりで食べてやらうとこんな事を考へました。

いくらバタリ〳〵はつても、迚も勝てさうもないがまさんは、

『いやだなあ。負けるにきまつてゐるからいや。』
と言ひましたが、お猿さんは聞きません。
『そんな事言はないで、面白いからやりませう　ソラッ、一二の三！』（兩手で白をつく樣子。）
とお臼を突きましたから、お臼はお餅の入つたまゝゴロン〳〵、ゴロン〳〵、ゴロ〳〵ゴロ〳〵。（兩手で臼の廻轉する樣子。）
だん〳〵勢がついてころがり落ちます。それを見てお猿さんは、
「サア、いゝかい。用意！。一二の三ッ！」
と先きへ走り出しました。
お臼は下へ行くほど勢よくころがります。お猿さんは眞赤な顏になつて、出來るだけ足を伸して走りましたが、お池のそばまで來ますと、大きな樹に勢のついたお臼がドシン！（拍手して突き當つた手眞似）と突きあたると、其の拍子に後から追ひついたお猿さんも一緒にお池の眞中へザブーン。（兩手で落ちた樣子。）
半分も、これぼち（人指し指の先きを出す）も食べられないと諦めて、あとからいつもの通り、パッタラ〳〵と出かけてお家のそばのお池の處へ來て見たがまさん、お池をヒョイと見ると、何かボカリ〳〵と浮んでゐる。
『ハテナ、何だらう？　お臼に似てゐるぞ。アッ！　お餅だ〳〵。
泳いで行つてお臼のうへへ上つて見ると、ホカ〳〵（湯氣の立つまね）けむりが出てゐます。
グ、、、グ、、、、
お池は靜、
だーれも居ない、
グ、、のグ、
ゆつくり御馳走になりませう、

グ、、、グ、、、
グ、、のグ。

○結

お猿さんはどうしたのでせう。お池へ落ちて沈んで終ひました。
がまさんは一人でおいしいお餅をみんな頂きました。
これでおしまひ。

運動會

注意

- **主題** 運動會で、一生懸命駈けた正ちやんの身體が、空中に浮き上つて、遂に月の世界に達する。月の世界で色々の樂しさを味つて、無事に歸つて來るといふ話です。
- **時間** 約十分
- **其他** 全體として輕い氣持で話したい。

ガラン〳〵〳〵。おしまひの鐘がなると、かあいゝ幼稚園の坊ちやんや孃ちやん。

「先生、左樣なら。」

「先生、左樣なら。」

左樣ならをすると、こつちの道へ二人。あつちの道へ三人。皆仲よくお家に歸りました。

お友達の正ちやん、國ちやん、清ちやん、大きなお口をあけて、

『今日の遊びもすみました。皆づれだつて歸りませう。先生、御機嫌よう。左樣なら。』

歌ひながらお家の方へ歸つて行く。すると正ちやん、

『あのね、明日のお休はね、僕の兄さんの學校の運動會だよ。見に行かうよ。』

『それは面白いや。ぢや皆で一緒に行かう。』

『ぢや左樣なら。きつとだよ。』

『左樣なら。』

正ちやんも、國ちやんも、清ちやんも、元氣よくお家に歸りました。

あくる朝になると、正ちやん、國ちやん、清ちやん、元氣で運動會を見に行つた。

『や、今度は綱引きだよ。』

『ほら、皆もう綱につかまつたよ。』

ピリ〳〵〳〵、ドン。合圖の鐵砲がなると、

ワイショ〳〵。赤かつ樣に、ワイショ〳〵。白かつ樣に、ワイショ〳〵。（身振に注意。）

見てゐた正ちやん、國ちやん、清ちやん、拳をしつかりにぎつて、ワイショ〳〵。（拳をにぎつて力をいれて首を振り〳〵見てゐる身振。）

赤かつ樣に、ワイショ〳〵。白かつ樣に、ワイショ〳〵（旗を以て先生が力を入れる身振と、生徒の一生懸命引く身振と、三人の子供の力をいれて見てゐる身振を交互に用ふ。）

すると、

『萬歲！』（兩手を上げて萬歲の身振。）

白がかつと、正ちやん、國ちやん、清ちやんも、

『萬歳！　』

駈つこもお遊戯も皆すんで、

『天皇皇后兩陛下萬歳！　萬歳！　萬歳！　萬歳！』

をすると、皆お家に歸りました。正ちやん、國ちやん、清ちやん、お家に歸りながら、

『面白かつたな。運動會は面白いな。』

『僕達も今度のお休にお友達とやらうよ。』

『面白いな。やらう〳〵。面白いぞ。』

お休がくると、その日はいゝお天氣。正ちやん、國ちやん、清ちやん、大きな聲で、

『運動會するものよつといで！　』（反復。調子「かくれんぼ」。）

といふと　あつちからも、こつちからも、

『僕もだよ〳〵〳〵〳〵。』

『あたいもよ〳〵〳〵〳〵。』

『やあ、みんな集つて來たな。さあ、これからやらう。一番初にあのお社まで駈つこだよ。』

『駈つこする者集れ！』

と號令をかけると、ズラーッとならんだ。正ちやん之を見ると、自分も駈けたくなつて、

『國ちやん、今度僕も駈けるよ。君ね、一二の三の合圖をしてくれ給へ。』

すると國ちやん、

『いゝかい。一二のドン！』

合圖をすると駈け出した、駈け出した。一度にドッと駈け出した。一番端つこ

にならんでゐた正ちやん、あんまり早く駈け出したので、いつの間にやら兩方の足が地面から浮きあがると、飛行機の樣にフワリ、フワリ。

『おや、フワリ、おや、フワリ、おや〳〵〳〵。』

一生懸命かけてゐたお友達も之をみると、

『あ、あ、あ、あーあ。』

びつくりしてゐる中に、正ちやんの體が空へフワリ〳〵上つていく。

『おや、上るぞ〳〵。』（いつの間にか手で空中を泳いでゐる樣な身振。）

フワリ〳〵高く上つた正ちやん、

『やあ、おもしろいな。あ、お家があんなに小さくなつたぞ。幼稚園も、あら〳〵あら、豆粒の樣だ。鳥が飛んでるぞ。（下の方を指し乍ら。）今日は己の方が高いや。えらいぞ〳〵。もつと上れ、もつと上れ。』

フワリ〳〵上つてゐる中に、お家も、幼稚園も、お山も、鳥も、見えなくなつた。すると、

『おや、今度は足がたつたぞ。おや、歩けるぞ。廣いな。』（身振に注意。）

『お山の大將己一人』と元氣よく歌ひながらどん〳〵いくと、

『あ、きれいなお家だな。誰のお家だらう。一ついつてみよう。』

大きな御門の前までいくと、中から、

ペッタラ〳〵お餅つき、
一つついたら赤いべゝ、
二つついたらおびとげた、
せつせとつきましよペッタラコ、
それつけ、やれつけ、ペッタン〳〵、
それつけ、やれつけ、ペッタン〳〵。

『おや。お餅をついてるぞ。あーあ、お腹がすいた。一ついたゞかう。』

トン〳〵、トン〳〵。

『御免なさい。（間。）お留守ですか。御免なさい。』

トン〳〵、トン〳〵、戸をたゝくと、

『はい、どなたですか。』

戸をあけたのがかあいゝ兎さん、

『おや、兎さん、今日は。僕ね、正ちやんといふんです。一體これは兎さんのお家？』

『あ、正ちやん、よくいらつしやいました。此處はね、月の世界といつてね、お月樣のお家。』

『お月樣のお家！　僕ね、お月樣大好き。うれしいな。』

『さあ、こちらへいらつしやい。』

兎さんについて行くと、お部屋のきれいなこと。どの部屋もどの部屋も、赤や、青や、金や、銀でピカ〳〵ピカ〳〵光つてゐる。お月樣のお部屋に行くと、

『やあ、正ちやんかい。よく來たね。さあ、ゆつくり遊んでおいで。おい〳〵、兎さん、今ついたお餅を澤山上げて頂戴』

今ついたばかりのお餅がお皿に一杯。白い湯氣がホヤ〳〵〳〵立つてゐる。

『お月樣、いたゞきますよ。』

『さあ、澤山お上り。』

『おいしいな。ほつぺたがとびさうだな。おいしいな。』（澤山たべる身振面白く。）

お餅をお腹一杯いたゞくと、今度はきれいなお花のさいた、廣いお庭で澤山の兎さんと、

お手々をつないで、野道を行けば、
皆かあいゝ小鳥になつて、……（踊る身振を簡單に。）

幼稚園でならつたお遊戯をして遊んでゐたが、正ちやん、

『あ、さう〳〵、お家でお母さんや、お父さんが、心配してゐらつしやるかもしれない。もう歸らう。あのね、お月樣、父ちやんや母ちやんが、心配するといけないから、今日は之で歸ります。』

『さうかい。感心だね。また遊びにいらつしやい。……おい〳〵、兎さん、おみやげにお餅を澤山おやり。それからね、お家までお船で送つておやり。』

銀のお船に正ちやんのると、兎の船頭さん、ギー、ギーと漕ぎだした。

『お月樣、さようなら。』

『またおいで、ね。左樣なら。』

お月さん、左樣なら、
銀の船、お船ね、
ギツコラ、ギツコラ漕いで、
わたしはお家に歸ります。

ギー、ギー。

お家ではお父さんお母さん、大事な正ちやん歸つて來ないから大心配。お友達の國ちやん、清ちやんも一緒になつて、

『おーい、正ちやんよー。』

『おーい、正ちやんやー。』（音調を變へて回數適宜。）

とさがしていらつしやる。之をきいた正ちやん、

『お父さんー、お母さんー、今歸りましたよー。國ちやんに清ちやんー。』

ニコ〳〵〳〵歸つたから皆大喜び。月の世界のお話をすると、皆でおみやげのおいしいお餅を澤山いたゞきました。おしまひ。